九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

翻訳 ： トマス・ヘイウッド著『エドワード四世』第1部

徳見, 道夫
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 ： 教授 ： 言語情報学

https://doi.org/10.15017/21812

出版情報：言語文化論究. 28, pp.233-310, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

翻訳：トマス・ヘイウッド著『エドワード四世』第１部

徳　見　道　夫

九州大学大学院言語文化研究院　言語文化論究　第28号　平成24年2月発行　抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

翻訳：『エドワード四世』

第１部

トマス・ヘイウッド　著
徳　見　道　夫　訳

【解題】

『エドワード四世』はThomas Heywood（1570年代の初めから1641年まで生存）の作品で、書籍商組合登記簿（Stationery's Register）に登録されたのは、1599年8月28日である。第1部と第2部に分かれており、今回翻訳した作品は第1部のほうである。訳者はシェイクスピアの歴史劇に関する論文をこれまで書いてきたが、『ヘンリー六世』三部作の資料を渉猟していた際、この作品に出会った。いろいろと関連資料を調査してみると、まだ日本では翻訳されていないことが分かったので、訳してみたいと思った次第である。訳者の力不足で、誤訳が多いと思われる。誤訳に関しては、読者諸賢の指摘を切にお願いしたい。

底本としてBaron Field (ed.), *The First and Second Parts of King Edward IV: Histroies by Thomas Heywood*; Reprinted from the unique black letter first edition of 1600, collated with one other in black letter, and with those of 1619 (London: Shakespeare Society, 1842) を使用したが、Richard Rowland (ed.), *The First and Second Parts of King Edward IV* (Manchester University Press, 2005) は、翻訳の際大いに参考にさせてもらった。ここに記して感謝する次第である。

１幕１場　グラフトンにて

エドワード王、ヨーク公爵夫人、王妃、ハワード卿、トマス・セリンガー卿登場。

ヨーク公爵夫人：　息子よ、自分でも訳の分からないことをしましたね。
エドワード王：　ある女性と結婚しました。確かに、母上。
ヨーク公爵夫人：　ある女性と結婚した、だと。本当に結婚した。
なんと王にふさわしい結婚だ。
急いでしたのは不思議ではない。
これが祝宴で、しかもどんちゃん騒ぎだ。
大したことをしたものだ。
エドワード王：　本当に、母上、いくらかの仕事をしました。しかし
まもなく王位継承者を作る仕事をします、疑いの余地は
ありません。さあ、さあ、まだお怒りでしょうか。
ヨーク公爵夫人：　おお、神よ、こんな日を見なければよかった。
エドワード王：　実際、母上、その夜も見て下さるようお願いします。
朝には、厚かましく母上に対してウェールズ皇太子の洗礼式を

行うようにお願いするでしょう。皇太子の祖母であり名付け親の
母親に。ちょっと、母上、ここは多忙な世界です。

ヨーク公爵夫人： このためにウォーリックをフランスへ派遣したのか。

エドワード王： 誓って、「いいえ」です、母上。ウォーリックは別件でフランスへ
派遣しました。しかしこの結婚が偶然身近におこり進みましたので、
どのようにとは話せませんが、結婚することにしました。そして
ご存知のように、今、幼少の王を得ようとしています。

ヨーク公爵夫人： 息子よ、話してくれ。どうお前は答えるつもりだ。
お前の性急で不法な行為が国と国の間に
恐ろしい憎悪を生まないだろうか。
お前がフランス王の娘に結婚を申し込むために、
ウォーリックを派遣しながら、卑劣にもお前の臣民と
結婚したとフランス王が聞けば何と思うであろうか。
フランス王女ボナはこの件をどう思うであろうか。
我々の高貴な従兄弟ウォーリック、あの偉大な貴族、
戦争では中心にとどろく雷鳴、
支柱のようにヨーク家を支え、勇敢にも頭上に
白バラをつけていたあのウォーリックが、
フランス使者の役目を虚仮にされ、
この件でお前から道具扱いにされたと知ったら、
魂が胸の中で赤くなり、恥が額で真赤となって
居座るであろう。彼の名誉がこのような
汚らわしい汚点で傷ついたのだから。
息子よ、息子。いいか、お前がしたのはこんなことだ。
まだ生まれていないお前の子供も後悔するような行為だ。

エドワード王： ちぇっ、母上、間違っています。全ての忠実な国民は、
本物のイングランド女性から、王が生まれるので、
神に感謝するはずです。いいですか、母上。 我々は外国人と
結婚してから上手く行かなかった。だから我々の子孫は
イングランド人の血が半分しかないニワトリでしかなかった。
しかし、雄鳥と雌鳥が同じイングランドの血統であれば、
闘う勇敢な鳥になるはずです。聞いて下さい、母上、聞いて下さい。
運命によって外国人と結婚すれば、あなたの息子たちの
ジョージとディックに王冠を渇望させておいたでしょう。
母上、この女性は未亡人で、彼女の真価は証明されています。
多分、夫であったジョン・グレイのように、私もその行為をする
つもりです。臣民に私の子孫を祝福するように祈ってほしい、
子孫を送られてくるよりは。黙っておいて下さい。事態をよく
見られれば、これほど前向きな息子を持った母親はおりません。
さあ、従兄弟のハワードとトム・セリンガー、妻についての
口論を何故黙って聞いているのだ。

ハワード： 陛下、母上の怒りを辛抱強く耐えて下さい。

陛下の母上の熱意は川のようであり、
水源の無制限な充満から
氾濫となって溢れてくるのです。
母上のあり余る心配から、この怒りは発して、
極度の愛で大きく膨らんでいるのです。

セリンガー：　陛下、陛下。女性の気まぐれは避けて下さい。
陛下が母上の高慢な意志に反抗されますと、
母上はこの感情に居座り、ついには我々の耳を
再び疲労させ、鈍らせることでしょう。
陛下がされた行為を申し訳ないふりをしなさい。
そうすれば母上はすぐに仕方ないと
満足して泣き出すでしょう。
陛下の行為を正当化しようとしますと、
必ず、「そんなことは駄目だ、ひどい」という
言葉が母上の口から出てくることは請け合いです。
女性の無駄話に辟易しているよりは
何でもいいからお話しなさい。

ヨーク公爵夫人：　ああ、お前たちは宮廷のおべっか使いだ。
このように気まぐれな王の機嫌をとり諂う。
だが、エドワード、お前が王位を正当に
評価していたら、臣下の寝室の残り物で
王の地位を汚すこともなかったであろう。
二重結婚の汚名もなかったであろう。
未亡人ですって、何ということでしょう。
グレイの子供達、王の祝福を求めなさい。

王妃：　母上、ヨーク公爵夫人、お願いです。
あなたは王の血族で未亡人ですので、私の
未亡人の立場を悪く考えないで下さい。
最初、グレイへ潔白の処女として嫁ぎました。
彼と一緒に、正直で誠実な妻として暮らしました。
怖れ多くも陛下が王妃という
崇高な称号で、哀れな悲しい状況に
恵みを与えて頂いたので、
多くの天使の前で宣言しますが、
グレイのもとへ処女として嫁いだと
同じように、陛下のもとへ貞淑な
未亡人として嫁ぎました。

エドワード王：　さあ、もう止めなさい。もう十分に文句は言われた。
本当に、母上が来るまでは、私たちはキリスト教国の中で
一番幸せであった。私は王妃で、臣下達は他の女性たちと。
ただこの宴会にはバイオリン弾きがいないだけだった。
しかし、母上、あなたは区切りを作ってくれました。

ようこそグラフトンへ、母上。本当に来てほしい時に
来てくれました。さあ一緒に夕食を食べましょう。そして
私達が寝室に行く時は慈悲をもって祝福して下さい。

ヨーク公爵夫人： エドワード、エドワード、この場所からすぐ離れなさい。
ここでは哀れで愚かな王は魔法にかかっている。
これは王妃の母親ベッドフォードの仕業だ。
彼女が哀れな息子エドワードをたぶらかしている。
この国の貴族たちの名誉を傷つけるな。
彼らが王妃の足元に跪くことで、
お前が威厳で彼らを飾る前に、
お前を軽蔑して見るであろう。
最も偉大な貴族と哀れで愚かな台所で働く
女中の間でも、お前の価値と
彼女の価値ほどの違いはない。

王妃： それは認めます。しかし、ヨーク公爵夫人、
私の母はあなたと同じように公爵夫人です。
王侯の生まれでベッドフォード公爵の妻です。
ご存知のように、王の血統を持つ
バーガンディ家の娘であり妹です。
空虚で世俗的な称号を考えているとしても、
母上は私を卑しいと考えることはできません。
神よ、このような自慢をしないように、
私の魂から罪を遠ざけたまえ。

セリンガー： 公爵夫人、王妃は本性を写す鏡なのです。
王妃に蚊が持っているほどの悪意があれば、
彼女の魂は嘲笑に耐えるに飛び上がることでしょう。
彼女は聖者ですので、公爵夫人の言葉は不敬です。
これほどしとやかな女性を悪く言われるので。

ヨーク公爵夫人： お前は寵臣で追従ものだ。

セリンガー： 奥様、王の母親でなければ、紳士を
侮辱したことを思い知らせてあげますのに。

ハワード： 従兄弟のセリンガー、我慢しなさい。
公爵夫人の怒りはあまりに激しいので、
すでに空気となっている。
公爵夫人、跪いてお願いいたします。
王妃に愛情をかけてやって下さい。そうすれば
王妃も心からそうすることを請け合います。

エドワード王： よく言った、従兄弟。 母上、どうか仲良くして下さい。
どうしたベス、何故 泣いているのだ。叱ることになるぞ。
どのような緊急の知らせをこの使者は持って来たのか。

使者登場。

使者：　陛下、私生児のファルコンブリッジが
このごろ南方で反乱を起こし、
先ほど廃位されたヘンリー王をロンドン塔から
助け出そうと、彼の軍隊を激励しています
彼のもとへ不満を持った平民達がサセックス、
ケント、エセックスのあらゆる地方から集まり、
彼の軍隊は二万人以上になっています。
状況から考えますと、上手く防がないと
ロンドンを乗っ取るつもりです

エドワード王：　そうか、このような行動をするパエトン[1]に、しっかり
坐るよう気を付けさせよう。さもないと聖ジョージにかけて、
首をへし折ってやる。これは新しい反撃ではない。
たしかに私は考えていた。いつかは私生児の
はやぶさ（ファルコンブリッジ）が翼を広げて、
鷲の高巣を襲ってくることを。彼の顔に
黒い不満があるのを見た。そして今は
よく見抜いていたと思う。
従兄弟のハワードとトム・セリンガー、
今晩は私の新しい王妃と愛する母上と
一緒に宴会をして楽しく過ごそう。
明日、この高慢な反逆者に対して
軍隊を集める命令を与えよう。
（使者に）私の意向を知らせるまで離れるな。
お前には、ロンドンに行って、市長と法律官と
友たちに手紙を持って行ってもらう。
夕食の準備はできたか。さあ行こう、きれいなベス。
母上、ようこそ。 私たちはあなたのお客です。　（退場）

1幕2場

ロンドン近郊

行進する軍隊、スパイシング、スモーク、チャブ、その他と
一緒にファルコンブリッジ登場。

ファルコンブリッジ：ドラムを止めろ。
スパイシング：　ドラムを止め、そして絞首刑にでもなれ。
スモーク：　ドラムを止めろ。静かにしろ。黙って宣言を聞け。
スパイシング：　嘘をつけ、この悪党。演説だ。
チャブ：　いや、皆、嘘をついている。「お話」だ。
ファルコンブリッジ：誠実なイングランド人よ、我が勇敢な友よ。

全員：　ほー、まことに立派な将軍。
スパイシング：　静かにしろ、悪党ども、あごをぶち割るぞ。
ファルコンブリッジ：親愛なる同胞、私は公然と宣言する。
王位簒奪者であり暴君エドワードから
ロンドン塔に哀れな囚人として捕えられている、
正当なイングランド王のヘンリー六世への
不正に本当に怒り、虐げられて不満を持つ
イングランド人がいれば、またヨークの隷属という
悲しいくびきから解放されたいという
イングランド人がおれば、そのために我々は
ガリー船の裸の奴隷のように働いているのだが、
ファルコンブリッジ公トマス・ネビルが…。
全員：　やあ、やあ。ファルコンブリッジ、ファルコンブリッジ。
スパイシング：　黙れ、騒々しい悪党ども　将軍、演説を続けて
ください。静かにしろ。
ファルコンブリッジ：ヘンリー王の哀れな苦しみの状況に同情して、
王の称号と臣下としての熱意で武装して、
ヨーク家に対して正義の戦闘を仕かけ、
我々の昔からある自由を宣言する。
全員：　自由、自由、自由、全員の自由。
ファルコンブリッジ：タイラー、ケイド、ストロー、ブルービアド、
その他の悪者の暴徒のように立ち上がるのではない。
卑しくも、彼らは鋳掛け屋や卑俗な奴隷のように、
計量の修正や穀物の値段、あるいは貧慾な人々に
囲いこまれたケント州の荒野にいる
平民のために反乱をおこしたのだ。
我々は有名なランカスター家の真実で古くから
存在する合法的な権利のために立ち上がっている。
ネビル家出身だから、我々の血統は高貴であり、
合法的な血筋からファルコンブリッジ公と名乗っている。
ここにネビルという名前を聞いて燃え立たない
鈍感な鉛のような性質を持った者はいるか。
全員：　ネビル、ネビル、ネビル
ファルコンブリッジ：我々と同じように、我々の闘いは名誉なもので、
法も我々の保証人だ。
スモーク：　そうだ、そうだ。法は俺たちの味方だ。
チャブ：　そうだ。法は俺たちの手中にある。
スパイシング：　黙れ、悪漢ども。
ファルコンブリッジ：さらに、真に聖別された王を助けることは
聖書からも祝福が与えられる。
勇敢な者たちよ、勇気を持ってファルコンブリッジと叫べ。
全員：　ファルコンブリッジ、ファルコンブリッジ。

ファルコンブリッジ：我々が造幣局の役人となって、
金貨に我々の刻印を押そう。
チープで売られている純銀と同じくらい
価値のある蹄鉄を我々の嘶く馬に付けよう。
レドンホール市場では、食べ物屋が食べ物を
売っているように、ペック[2]の単位で売ろう。
ウェストミンスターでは、厳かな宮廷を持ち、
部下を収容するためもっと大きく造ろう。
親愛なる諸君、ファルコンブリッジと自由を叫べ。
全員：　ファルコンブリッジと自由、ファルコンブリッジと自由。
スモーク：　黙れ、悪漢ども。さもないといぶすぞ。
チャブ：　黙れ、悪漢ども。さもないとあごをぶち割るぞ。
しかし、お前が部下をいぶすのはもっともだ。
お前の名前はスモークだからな。
スモーク：　チープステッドのかじ屋のスモークは、サンドウィッチの
雑貨商であるチャブと同じくらい善人であることを望む。
スパイシング：　黙れ、悪漢ども。何と、喧嘩しているのか。
今度は指揮官スパイシングの話を聞け。
チープサイドは知っているな。そこに服地商の店がある。
そこで我々はビロードを矛で計り、
絹やサティンを通り全体の広さで計測する。
導管の栓から大コップを取り出し、
ヒポクラス[3]で一杯にして飲み乾そう。
ケント州の荒野にある木の皿と同じくらい、
そこでは金の鎖や大皿がたくさんあるのだ。
スモーク：　良く言った、ネッド・スパイシング。器の中で香料を
捏ねた中で一番正直な男。今度は指揮官スモークが話す。
見ろ、男たち。この丘から俺たちが
行進して行く美しい町が見えるだろう。
あれがロンドンだ、男たちよ、お前達が見ているのは。
奇妙な光景を見ている鹿の群れのように、
準備された料理を熱心に見つめる
空腹な旅人の群れのように、
親愛なる諸君よ、並んでロンドンを見ろ。
ロンドン塔が、捕虜のヘンリー六世を
助け出せと誘っているのを見ろ。
聖キャサリン教区からの煙を見ろ。お前達、目を拭いて、
おいしいビールを飲む食欲を刺激しておけ。
チャブ：　これでは、俺は無名の人間だ。場所をあけろ、
これから指揮官チャブが話す。
ロンドンに俺たちが着いたら、すぐ
パン屋はお前達に渡すが、醸造業者は俺のものだ。

バーチン通りは俺たちに合う、呼売り商人は果物をくれる。
鳥屋は鶏を送ってくれるし、
肉屋の肉は無制限にくれる。
俺たちが飲んだり食べたりする時は、
ワイン商人がワインを進んで持ってくる。
もし誰が支払いをするかと聞かれたら、
そいつの頭を切り落とし、追い払え。
これが指揮官チャブの法律だ、文句のある奴はいるか。
ファルコンブリッジ：勇敢にも決意したな。さあ全員で行進しよう。
大胆にも叫べ、「幸運が我々に下りるように」と。（退場）

1幕3場　ロンドン、ギルドホール

ビロードのコート、頸鎧、指揮棒を身に付けて
ロンドン市長、ショア親方、ジョセリン親方が登場。

ロンドン市長：　よくやった。善良な市民は平和でも
戦争でも、きちんとした服装をするものだ。
全ての街並みが暗くなったらすぐに、
明りを吊るすように命令したか。
従兄弟のショア、答えよ。あなたに命令されたから。
ショア：　閣下、しました。さらに全ての館から
少なくとも二百人の武装兵が来ます。
ロンドン市長：　この用意周到さを聞いたら嬉しくなる。
反乱者に忠実な臣下を決して敗北させるな。
来るならいつでも来い。彼らが来なければ
良かったと思うくらい歓迎してやろう。
だが、法律官はどこにいる。彼の助言は、
こんな重大事件では欠かすことはできない。
ショア：　一時間前に、あるいはもう少し前に、
橋を防備をしている彼と別れました、閣下。
それを終えたら、閣下に会いに来るつもりでした。
ロンドン市長：　彼は慎重で用心深い男だ。
ロンドンを安全に守り、王の感謝と
信頼を得ようと思うなら、我々も
彼のようにならなければいけない。
皆さん、私は年寄りですが、
私としては、今晩は寝ることはない。
ジョセリン：　どうして。私生児は近くまで来ていますか。
ロンドン市長：　ジョセリン親方、「近くに」とはどんな意味ですか。
彼はイタリアやスペインから来るのではなく、

ケント州やエセックス州から来ます。ご存知のように、
それらの地域は近いし、これ以上近いところはない。

ジョセリン：　いや閣下、おそれながら一言。
私は愚かですが、言わなければなりません。
遠くの災害は何とかと申します。
意図はお分かりでしょう。前に見えないものは
しかじかです。だが、真面目に言いますが、
全て順調に行くよう願っています。多分、
そうなるでしょう。ええ、希望がなければ
心意気しかじかです。だが要点を言えば、
閣下は心意気を持っています、たしかに持っていますね。

ロンドン市長：　ジョセリン親方、良い意味で言っていると確信します。
しかし、いくぶん話し方に難がありますね。

ジョセリン：　ええ、市長閣下。ご存知のように、私は積極的に
用意をしています。しかじかと。私としては、ハッハ。
私の住居はハムにあります。そこからご存知のように、
この困難な状況にあるあなたを助けにきました。
反乱者が忙しい、しかじかの状況で。
何と、親方たち。高齢は軽蔑されるべきではない。
ロンドン市長、私はいつもお側にいます、しかじかと。

法律官のアースウィック登場。

ショア：　閣下、法律官殿が来ました。

法律官：　今晩は、ロンドン市長閣下。通りは鍵がかかり、
橋に人が配置されて、全ての場所は準備万端です。
他に何か決めることがないかどうか、
一緒に話し合いましょう。

ロンドン市長：　法律官、あなたが来ることを我々は
望んでいました。だから話し合いましょう。
我々の兵力の半分で、こちらから出て行って
攻撃をするのはどう思いますか。

法律官：　反乱者たちがもっと近くで扇動する前にですか。
皆が賛成すれば、それしか方法はないでしょう。
ジョセリン親方、あなたの意見はどうですか。

ジョセリン：　本当に、市長閣下と法律官殿、
あなた方が選ぶとよいでしょう。私の考えでは、
攻撃したければするし、門内にいたければいればよい。
人は用心しすぎることはない、しかじかと。
出て行くことも止まることも悪くないでしょう。
ええ、もう少し考えたほうがよいでしょう。
しかし全ては一つです。争うことは確かです。

あなた方は時期を見ることについては賢明です。
ええ、ええ、本当にそうです。

法律官：　閣下、
彼の助言よりその意味を取りましょう。

ロンドン市長：　ええ、そうしよう。さもないと非難されるだろう。
我々の持っている船舶を繋留して、
テムズ河の通行を止めてはどうか。

法律官：　しかし閣下、我々を攻撃するために反乱者が
その通路を取るかどうか疑わしいです。
むしろ私が思いますに、彼らは陸地を通って、
ロンドン橋を攻撃してくるかもしれません。
オールドゲートかもしれません。どちらの入り口も
防備をしっかりしておいたほうがよいでしょう。

ジョセリン：　よく言われた。法律官殿。本当に、良いことを言われる。

法律官：　その他に関しては、最高の防衛のために、
服地商、食料雑貨商、織物商、その他の
全ての仲間達をロンドン塔の近くや、
その場所の近辺に集める。
一方では、テムズ河から反乱者を取り除き、
他方では、彼らを大砲により、
我が軍は撃退し追い払う。

（ギルドホール内部で騒音）

ロンドン市長：　この騒音は何だ。すぐに準備をして
全員持ち場につけ。

使者登場。

ショア：　静かに、誰だ。どうした友よ、何か知らせでも。

使者：　私の主人のロンドン塔の副長官が、
反乱軍を確認したという
情報をお伝えします。

法律官：　どちらからやって来ているのか。

使者：　エセックスの方角からです。副長官はオールドゲートと
ビショップゲートの両方を守ってもらいたいという考えです。

ロンドン市長：　聖ジョージにかけて、行け。全員、決意しよう。
この反乱軍の暴徒を打ち破り、
我々の所有物、子供達、妻たちを守るか、
あるいは生命にかけて我々の決意を証明するか。

1 幕 4 場　　ロンドンに通じる門の前で

スパイシング、スモーク、軍隊とともにファルコンブリッジ登場。

ファルコンブリッジ：ロンドン市民を呼び出し、我々を町に入れさせろ。
それを頑固にも断わられたら、
我が軍が雷のように壁を駆け抜けよう。
スパイシング：　俺が命令する時、お前たち、門をあけろ。

スパイシングが門を叩く。ロンドン市長が、壁の上に、
仲間や従弟とともにあらわれる。

ロンドン市長：　ロンドンに通じる門を叩くのは誰だ、
あたかも王のように町に入ることを命令して。
ファルコンブリッジ：私はファルコンブリッジ卿のトマス・ネビルで、
王の解放をしようとする者だ。
スパイシング：　こらっ、乞食、鍵を開けろ、門を開けろ。さもないと
ロンドンに入った時、追い出すぞ。梅毒持ちが説教するのか。
ロンドン市長：　トマス・ファルコンブリッジ、お前の武装した軍を
ロンドンに入れる正当な理由がない。
お前が国王や国の平和を脅かして、
このような軍隊を集めたと考えると。
ファルコンブリッジ：市長よ、お前に言うが、王を守るために
武装してきた者が言っていることを聞け。
ランカスターの真の血統を持つヘンリー王の
名前でロンドン内に入ること願っていることを。
思うに、その言葉はネビルの口から話されると、
地震のように鎖をかけられた門を破り、
お前の落とし格子門を粉々にするであろう。
もう一度お前の耳に叫ぼう、
頑健で勇敢で勇猛なロンドン市民よ、
ヘンリー王の名で、町に入ることを要求する、と。
法律官：　ヘンリー王の名前でロンドンに入場するなら、
我々はエドワード王への忠誠を否定することになる。
彼の真の忠実な臣下として誓いを立て、
彼の王権のために剣を高く掲げるのだ。
ファルコンブリッジ：いいか、反逆者。そうすれば真の疑いなき王に
対して剣を向けることになるのだ。
ショア：　いや、いいか、私生児のファルコンブリッジ。
市長閣下は王を守るために剣を持っており、
王がロンドンの紋章に剣を与え、
代々の市長を騎士に取り立て、
ヘンリー・ボリンブルックが廃位したリチャードから
ヨーク家の正当な権利を主張されているのだ。

ファルコンブリッジ：生意気にも我々に答えている奴は誰だ。
スモーク：　お前の名前を言え、これから覚えておこう。
ショア：　名前はショアだ、商売は金細工師だ。
ファルコンブリッジ：何と、美しい女房を持っているショアではないか。
美しいのでロンドンの花と言われる「ショアの妻」。
ショア：　そうだ、反逆者、まさにそのショアだ。
スパイシング：　走って行って、お前の女房をすぐに将軍のところへ
連れてこい。さもないとチープサイドの全ての黄金でも
彼女の身代金には足りない。命令しても動かないのか。
ファルコンブリッジ：ショアよ、聞け。お前の妻は俺のものだ。そうする。
今晩、お前の家で、彼女は俺と寝る。
さてロンドン市長のクロスビイ、ロンドンに入ってよいか。
ロンドン市長：　高慢な反逆者、ロンドン市長クロスビイは「駄目だ」と言う
ファルコンブリッジ：駄目なのか、クロスビイ。入れないのか、耄碌した市長。
「反逆者」という言葉をお前の口に突っ込んでやる。
私の軍隊の最もみじめな奴でも、
チープサイドでお前に会えば、
馬の装飾布を踏んで、お前を馬から下ろし、
あぶみをもって馬に乗る。
そして行きたい方向へ行くのだ。
クロスビイ、お前や仲間である市会議員を
ガリー船の奴隷のように手かせ足かせして
鎖でつなぎ、身代金を払いロンドン市を
救うようにして市民達を楽しませてやる。
ロンドン市長：　傲慢な反逆者よ、待て。私の言うことを聞け。
王に忠実な臣下であるもっとも哀れで
卑しい市民でも、お前の反逆的暴動を
ものともせずに、手には小さな職杖を持って、
たとえマイルエンドグリーンでお前たちが
野営をしていても、ボウ通り[5]に向かうことだろう。
そしてお前たちのうちで最も傲慢な反逆者でも、
呪われた魂のために、市民に触れることもできないだろう。
さあ、落し格子をあけて、お前たちが敢えて
入って来るかどうか見てみよう。

ロンドン市長と市民たちは上舞台に上がる。

ファルコンブリッジ：男らしく言った。お仕着せの市長[6]。
我々はロンドンに入るか、途中で攻撃するかだ。

ロンドン市長、法律官、ジョセリン、従弟たちが裏門から登場。

ロンドン市長：　法律官とジョセリン親方はどこにいる。
法律官：　市長閣下、ここにおります。今、城壁に人を配置し、
必要なところに防備の強化をしました。
ロンドン市長：　よくやっている、同胞や市民たち。
立派な人々がするように町を固守せよ。
リチャード王の時代に、そのような反逆者は、
当時のロンドン市長であるワルワースから
スミスフィールドで刺殺されたことを思い出せ。
そして時代に合わせて真価を示せ。
今は百人のワルワースが、反逆者がたとえ
真鍮でできていても殺す状況だと思え。
そして、従弟たちよ、指揮する人物を固守せよ。
いつかお前たちも、我々と同じようになるのだ。
神と王よ、極悪な反逆者から守りたまえ。
兄弟たちよ、行こう。城壁を守るのだ。
第１従弟：　閣下、あなたの言葉は臆病者の胸に
二倍の勇気を吹き込むことができます。
心配はいりません。あごに髭はありませんが、
気は強いほうです。この緑の平原で、
試練は反逆者たちの方に見られるでしょう。
第２従弟：　我々は戦争の駆け引きや戦略を知りません。
しかし、先祖たちの古くからの習慣により、
反逆者たちを徹底的に攻撃し追放します。
ロンドンの従弟たちよ、私について来なさい。
立派なロンドンの自由を失うよりは死のう。

スパイシング、ファルコンブリッジ、スモーク、その他の反逆者たちが登場。

スパイシング：　どうした、ロンドン市民よ[7]。それほど勇敢になったのか。
勇敢なのは言葉だけだ。戦いで験される時、
お前たちは羊の群れのように逃げ出すだろう。
だから私の忠告は「店を守れ」ということだ。
「何が品薄か」のほうが、戦闘の言葉よりお前たちの
口に合う。本当に、お前たちは若すぎる。
第１従弟：　おいおい、お前はそうは思わなくなるだろう。
我々をロンドン市民と呼ぶのか。その名前は嫌ではない。
すぐに、剣の力で、お前の帽子と頭が
ぴったりするようにしよう。
頭と帽子を一緒に地に倒すように。
第２従弟：　お前たちは絶望的で怠慢でホラを吹く奴らだ。
平和時にはロンドン郊外に出かけ、
通りの酒屋で騒々しい喧嘩を起こすが、

戦闘という噂が聞こえ出すと、
頭を隠し見つからないようにする。
店を守るほうがよいとお前は言うのか。
たしかにそんな配慮を持ったほうがよいだろう。
しかし時折、我々の管理にも拘わらず、
お前たちのくすねる指が鍵の中に入り込み、
終にタイバーン[8]で罪を認めることになる。
礼儀を奉じる人のように、慣習により我々は温和だが、
怒りが湧いてくると、短気なスズメバチ[9]の一群も
我々よりも攻撃的と言えなくなる。
敵の耳のまわりを飛んで、心臓を刺すのだ。

ジョセリン：　友人たちよ、彼は真実を話している。しかじかと。

ファルコンブリッジ：少年たちに挑発されて、耐えることができようか。

第１従弟：　いや、従弟だからと言って、馬鹿にしないでくれ。
イングランドの史書は、我々の記憶すべき行為を
報告し得るが、その中に、
今日の業績も編みこまれ、本の厚さを
それだけ大きくすることであろう。

ロンドン市長：　名誉にかけて言うが、お前たちは勇気づける。
勇敢なイングランドの子孫たち、勇ましくも決意した。

第２従弟：　閣下、城内に戻って下さい。我々だけにして下さい。
あなた方は親方ですから、我々に働く許可を下さい。
闘いで彼らを破ることができなければ、
夜は夕食なしに寝ることにします。

スパイシング、スモーク、彼らの仲間以外退場。

スパイシング：　スモーク、聖ボトルフ教会の尖塔の天辺に登って
布告を行なってくれ。

スモーク：　どのような災難を宣言すればよいのだ。

スパイシング：　鐘は逆行して鳴らすこと、喉をかき切る時は
「破滅だ」と叫ぶこと。「ちょうちんとろうそく」
というかけ声をやめること。処女は全く価値が
ないこと。ワインはヘルメットで計り売りすること。
けちな奴は錠をこじ開けるのではなく、
牛の腹を切り取るように、蝶番を切り落とすこと。

スモーク：　衣装タンスには倉庫を持たせ、「巡査なんか糞食らえ」と叫べ。
債務者用の刑務所の横を王侯のように通り過ぎろ。
ボウ教会の鐘の舌を引っこ抜いて、ロンドン市内の
すべての寺男をしばり首にしろ。

スパイシング：　破滅だ、破滅だ[10]、野郎ども。器の中に香料を
練りこんだ人の中でもっとも気違いであった

カバレロ・スパイシングという指揮官に従え。
スモーク：　金貸しの油のついた小袋を取って、空腹の犬がハギス[11]を
揺するように、クラウン金貨をばらまいてみろ。
野郎ども、汚い手は禁じる。正直な泥棒と盗みで生活をしろ。
素直な指を持っている者は、顔をフライパンのようにしろ。
野郎ども、指揮官に従え、指揮官に従え。
スパイシング：　攻撃だ、攻撃だ。そして「ファルコンブリッジ」と叫べ。

城壁の上のジョセリンが反逆者たちに向かって叫ぶ。

ジョセリン：　おい、スパイシング。お前の名前がスパイシングなら、
内容でも原因でも、王のために我々はここにいるのだ。
だから好都合だ、しかじかと。
スパイシング：　門を開けろ。俺たちが泥棒なら、悪漢ども、
お前たちの間で番犬のマスチフのように振る舞うぞ。
俺の歯で、お前たちの千人くらい苦しめないと、
細引で俺を絞首刑にしてくれ―しかじかと。
ジョセリン：　愚かな野郎、正義は執行されるべきで、正にそうだ。
また、言わば、法も守らなければならない。
神よ、守らせたまえ。判事は相応に力を持っており、
義務も遵守されるべきだ。作法通りに
官吏は従われるべきだ、しかじかと。
スパイシング：　すぐにもっと話そう、立派な「しかじか」親方。

あらゆる場所で激しい戦闘、その中で従弟たちが立派な働きをする。
怒ってファルコンブリッジが部下とともに登場。

ファルコンブリッジ：ああ、これが卑劣な悪漢たちを信用した結果だ。
この卑しい百姓の汚い浮きかすたちを、
このさもしい悪意の冷酷な暴徒たちを。
お前たち皆疫病にかかれ、臆病な悪党。
卑怯な野良犬、下劣で不純な田舎者、
お前たちの勇気は集団を頼んでおり、
羊や牛のようにお互いがお互いの後を追い、
一匹が逃げれば、他は後を追っていく。
この下等な生まれの悪党、汚い海にいる小魚。
お前たち全員復讐されろ。これが末路だ。
さあ、激突ごとに叫び、大声をあげろ。
熱く激しく焼き尽す不幸が、お前たちを追え。
スパイシング：　本当だ。お前たち、登れ。ファルコンブリッジ、
ファルコンブリッジ。

城壁にロンドン市長と従者たちが登場。

ロンドン市長：　門を開けたままにしておけ。こちらから反撃しよう。
私が市長職にある間は、ロンドン市民たちが町に
閉じこもっていたとは言わせまい。
「エドワード王」と叫んで、攻撃を仕かけよう。
ファルコンブリッジ：さて、お前たちが真実の心を持つイングランド人ならば、
門は開いたまま、落し格子は上がったままなので、
市内に乱闘を持ちこもう、そうすれば相手の通路を妨げる。
最初に市に入りこんだ奴はチープの町を与えよう。
気前よくその町を与え、しかも最高の美人も一緒だ。
スパイシング：　最高の美女は見つかるし、取引きでは横にもできる。（退場）

1幕5場　前場面からの続き

ロンドン市長と市民が勇敢にもロンドンから反逆者たちを追い払った後、
傷つき狼狽したファルコンブリッジ、スパイシング、従者たち登場。

スパイシング：　聞いているか、将軍。ビショップゲートのマウス酒場に
興奮させる宴会があり、我が兵士たちは入口にいる。
脳が叩き出され、ごろつきのように横になっている。
俺たちはハウンドディッチの豚の餌のようなものだから、
軍隊を撤退させて、傷ついた兵士を救おう。
さらに攻撃を仕かければ、仲間全員が剣で刺されてしまう。
ファルコンブリッジ：お前は「傷」という言葉しか話さない
呪われた口を持つ悪党なのか。
お前の卑怯な手足は開いている傷口で切込みが入り、
それはどんな心配性の職人の掛け売り表より厚く、
あたかも石に叩きつけられた大杯のように
頭皮はひっかかれ、ひびが入り、壊れているのか。
負傷した兵士を救おうとじっとしているのか。
臆病者、疫病にでもかかれ。
スパイシング：　どうした、下劣なトマス。本当にお前がコントラバス[12]なら、
俺と同じように、ただ悪漢で反逆者だ。聞いているか。
真の家来になりお前を見捨てなければ、犬と殺してくれ。
全く、お前は俺の男らしさに文句をつけたな。トム・ネビル、
そんな言葉を吐くくらいなら、自分を呪ったほうがいい。
きっぱりお前を見捨てる。ネッド・スパイシングに
好意を持つ者は、俺の後についてこい。

ここで他の者がついていこうとする。

ファルコンブリッジ：さあ、さあ、怒りっぽい奴。俺が苦しむのを
知っても、俺の欠点には我慢ができないのだ。
イングランドの空気を吸うどんな男よりも勇敢な
男であると俺が思っていることをお前は知っている。
お前ほど炎の性質を持ち、固い決意をしている
勇敢な男はいない。いまいましい。俺が
お前を好きなことを知っているな。怒りから
言葉が俺の口から出たとしても、何と怒りっぽいのだ。
俺は他の奴ら全員よりお前だけには残ってほしい。
お前は俺の魂であり、守護神だ。
一時間でもお前がいないと生きていけない。
（傍白）うす汚い奴め、臆病な悪漢を宥めるために、
意志に反して、このような言葉を言わねばならぬ。
（声を出して）さあ、友でいろ。怒りっぽい燃え木。
退去しよう。他にどうしようもないのだ。
スパイシング：　いや、トム。お前が俺を城壁に登らせ、
真っ逆さまに忍び返しに身を投げろと言えば、
俺はする。だが勇気を非難することは許さない。
お前以外の奴が半分でもそんなことを言ったら、
そいつの心臓を裂いてやろう。俺の勇気を語る時は
気をつけろ。そんな言葉はとうてい飲み込めない。
さあ、俺は友だ。お前は口ほど悪い奴ではない。
ファルコンブリッジ：そうだ、魂に誓って。お前は知っている。
すぐに退却のラッパを鳴らしてくれ。
だがどこに退却しよう。
スパイシング：　マイルエンドグリーンまで。それ以上の場所はない。
ファルコンブリッジ：それならマイルエンドグリーンまで退却しよう。
そこで友軍からの援軍を待つことにしよう。
確かにまもなく来る援軍で、あの町は
我々のものになるだろう。進め、行こう。　（退場）

1幕6場　前場面からの続き

従者と従弟たちと一緒にロンドン市長が登場。

ロンドン市長：　善良な市民としてよく奮起し、
王に対して忠実な臣下であることを示した。
従弟たちよ、立派に奮起したので、
お前たちの勇気を見て心が躍った。
反逆者はマイルエンドグリーンまで後退したのか。
法律官：　そこでも我々は反逆者にゆっくり休ませず

新しい戦力で攻撃しましょう。
ジョセリン：　市長閣下、熱心なことは良きことです、しかじかと。
物事はしかるべく追求されねばなりません。
事態がうまく収拾できれば、できたのです、しかじかと。
原因と事態は実に追求されるべきです。
ロンドン市長：　いや、我々はあなたの意図をよく理解しています。
そしてあなたは価値ある紳士と証明された。
我々の城壁が守備隊で守られ、
敵を十分に防ぐようにして下さい。
これからギルドホールまで下がって
さらに何をすべきか助言を聞こう。

2幕1場　ショア家

ショアと彼の妻ジェーン登場。

ショア：　愛しい人、怖れることはない。最悪の事態は過ぎた。
神を称えよ、勝利は我らのものだ。
我らが勝って反逆者たちは後退した。
ロンドンの全ての通りは喜びの声が響いている。
優しいジェーン、一人だけ悲しむことができるのか。
ジェーン：　あなたが私といるので悲しくありません。
私の喜び、希望、なぐさめ、愛、
私の愛しい、愛しい夫、親切なマシュー・ショアが。
しかし、私の魂を囲うこれらの腕が、
(聞くところによると)、勇敢にも戦闘していた時、
愛しい人よ、怖れざるを得ませんでした。
ショア：　危険は去ったのに、何故いま震えているのか。
ジェーン：　その時の恐怖を思い出したからです。
教えて下さい。何故それほど必死に闘ったのか。
ショア：　第一に、エドワード王の王威を守るため。
第二に、町の自由を防御するためだ。
だが、ジェーン、何よりも、私の面前で
お前を犯すと言った人物から守るためだ。
彼が勝っていたら、我々の生活はどうなっただろう。
娘は犯され、美しき妻たちは強姦されたであろう。
物品は奪われ、召使いは解放されたであろう。
だが、これらはお前を失うことを思えば何でもない。
ジェーン：　愛しい人、私をですって。どうして私を失うのですか。
たとえ数多くの運命の嵐に翻弄されても、
最も貧しくみじめな生活に耐えようとも、

ジェーンはあなたの誠実で忠実な妻です。
太陽がこれまで光を与えた最も偉大な王でさえ、
私を不誠実な妻にはさせません[13]。
ショア：　正当な手段のことではない、反逆者の力だ。
ジェーン：　力やお世辞が私の名誉を汚す前に、
私の手が生命を奪いとるでしょう。
ショア：　死が肉体を破壊すれば、真の名誉は生き残る。

ロンドン市長の使いである役人登場。

役人：　失礼ながら、ショア親方と奥様に祝福があるように。
市長閣下が私を使者に立てまして、すぐに
ギルドホールにおいで下さいとのことです。
反逆者が再び進軍したという知らせがあります。
そしてマイルエンドに駐屯していますので、
すぐに我々の武装した兵士が出発すべきです。
勇気と腕前に敬意を表して、あなたは二つの部隊の
指揮官ですので、前線を指揮する必要があります。
神と正義があなたとありますように。
ショア：　友よ、閣下に私がすぐ行くと言ってくれ。
ジェーン：　友よ、閣下は夫を酷使していると言ってほしい。
いつも夫を危険の最前線において。
私が思い通りにできるなら、戦場には行かせません。
ショア：　妻よ、黙りなさい。もういい。友よ、後から行きます。

役人退場。

ジェーン：　本当に行かせません。お願いですから、行かないで。
ショア：　行くなだって、愛しい人。他の人々が闘う時に
怯むのは、臆病者の策略で逆賊の役割だ。
悪意ある人にも言わせない、他の男たちは
王の敵であり国の敵と闘っている時、金細工師の
マシュー・ショアは家に閉じこもっていた、と。
いや、ジェーン、マイルエンドの反逆者全員に対抗して、
私は一人でもエドワード王の権利を守る。
ジェーン：　あなたが殺されたら、私はどうなるでしょうか。
ショア：　いいですか、可愛い人。十分な資産で結婚しなさい。
少なくとも五千ポンドの財産を残しておく。
ジェーン：　再婚するのですか。その言葉は気持ちを傷付けます。
再婚はしないし、生きてもいません。（泣く）
あなたが死ねば。マット、一緒に連れて行ってほしい。
ショア：　立派なジェーン、これは無駄な話だ。やめよう。

あなたは最上の人々と友達だから、
市長の家族[14]などのところへ行きなさい。
一緒に楽しくやり、我々の成功を祈ってほしい。
ジェーン：　あなたと別れると、心が血を流すようだ。（退場）

2幕2場　マイルエンド

マイルエンドで、行進しながら軍隊とともにファルコンブリッジ登場。

ファルコンブリッジ：聳え立つトロイを見て我々は立っており、
トロイが吸う空気を吸っている。我々の息は
鼻から出て暖かいまま壁に向かっている。
我々は毛が逆立つ尖塔や砦で固めている塔に反抗し、
誇り高く立って、その顔を真正面から見ている。
私を見なさい。お前たちが私の価値をどんな人より
偉大であると思っていることを、私は疑っていない。
私の財産は、エドワードに諂えばイングランドの
どんな人間よりもすばらしいのだ。
だがロンドン塔にお前たちの王を幽閉している
エドワードは、私の土地を押収し権利も奪った。
私は彼と同じように紳士階級の人間だ。
彼が所有しているものは、暴政で取ったものだ。
さて、お前たちが気弱くなり、臆病にも逃げれば、
誰にも生きる希望はない。
ロンドン市民たちは町を離れて、我々と
マイルエンドグリーンで闘おうとしている、と聞く。
もし我々が勝てば、町はこちらのものとなり、
勝ち誇ってチープから聖ポール寺院まで馬で進む。
造幣局[15]は我々のものだ、チープやロンバート通りもだ。
最も身分の低い兵士さえ王より金持ちになる。
スパイシング：　悪党ども、きれいに行進しろ。全員が王侯か帽子編み職人[16]だ。
トム・ファルコンブリッジ、聞いているか。
俺が頼む恩賞を与えてほしいのだが。
ファルコンブリッジ：ネッド、それは何だ。お前の願いを断るのは難しい。
スパイシング：　ああ、俺たちが町を占領したら、それは間違いないが、
そうしたらこの悪漢やごろつきどもを騎士にするのだ。
ファルコンブリッジ：それからどうする。
スパイシング：　それからだって。まったく、俺はお前の下劣で
口の曲がった「それから」が大嫌いだ。
さあ、絶対に戦わないぞ。
ファルコンブリッジ：これはいい。さて誰を騎士にする。

スパイシング：　誰をだって。俺が彼らを騎士にするかって。ボロボロの服を
着た悪漢たちの仲間としてしばり首になるのを見たい。
もし俺が王なら、誰も騎士にはさせない。
チャブ：　カバレロ・チャブという俺でも駄目かい。
スパイシング：　そうだ、お前を騎士にするかどうかどうでもいい。俺が
それほど名誉を与える前にしばり首にされるのを見たい。
その事はあまり気にしないが、俺の気分は否定されたくない。
ファルコンブリッジ：ああ、お前は何とひねくれた奴だ、ネッド。
スパイシング：　ほー、立派なトム、勇敢なファルコンブリッジ、気違いの
ギリシャ人、好色なネビル。お前は王でシーザーだ。
ちくしょう。お前が嫌いだが、お前と一緒に死のう。

行進しながら、ロンドン市長、法律官、ジョセリン、ショア、兵士たちが登場。

ロンドン市長：　反乱でも自画自賛できるのを見なさい。
統制のない羽毛を整えているのだ。
法律官：　我々の誠実な顔付きより勝ると彼らは思っている。
ショア：　ファルコンブリッジの蔑みの目を見なさい。
ロンドン市長：　私はむしろ彼の頬にある恐怖が、
心の臆病な戸惑いを表していると思う。
ジョセリン：　我々が来たからには、いやこれ以上は言うまい。
だが話す機会をもらえますかな、しかじかと。
反乱には休息などあるはずがない。ああ、神よ、
時代はこうだ、だが全てのものは同じだ。
スパイシング：　下品で乗り潰されたやせ馬の群れのように、
むこうにひげ面のロンドン市民がいる。
チャブ：　いやむしろ、月の中に多くの男がいて、一人一人の
口にハリエニシダの茂みがついているようだ。
スパイシング：　二十四の守備隊か[17]。彼奴らに良きことが起これ。
この時までには、泥まみれな奴らがあれほど
増えるとは誰も思っていなかったろう。
ファルコンブリッジ：黙れ、兵士たち。明らかに彼らは決意している。
我々に媚びもせず、彼らを過大評価もしない。
そのような気高い勇気が市民の胸に
宿っているのは見たことがない。
遅れてくる王の助けなしに、
彼ら独自の力で手厳しく
この頃城壁から我々を撃退した。
そして今再び何と手早く、
予想に反してここで我々と対峙している。
我々が今より激しく激高していれば、
彼らの義侠を褒めざるを得なかったであろう。

スパイシング：　指揮官、行って闘うよう挑戦しましょうか。
本当に、俺たちは時間を浪費している。俺たちが
輝く剣を恐れているとじきに彼奴らは考えますよ。
チャブ：　彼らに話せ、闘うのではなく、プディングや
ストラットフォードのケーキ無しで宴会をするのか、と。
ファルコンブリッジ：静かに、許してもらおう。彼らの不屈の精神を
言葉で弱体させ動揺させよう。
法律官：　私生児がこちらに来ます、閣下。
ロンドン市長：　私が話し相手になろう。
ファルコンブリッジ：クロスビイ。
ロンドン市長：　反逆者。
反逆者たち：　反逆者だって、彼をやっつけろ。
ファルコンブリッジ：辛抱しろ。いいか私に話をさせろ。
反逆者という名前は正当な王を
拘束している人にあてはまると思う。
それはさておき、ロンドン市民よ、もう一度
見よ。私の戦旗がたなびいており、
お前たちの大きな建物が倒れるまで、
またロンドンの通りを通過するまで、
戦旗は収められることはないと誓った。
法律官：　「通過」と言うのか。どうしても通過したければ、
我々の胸の上しかない。
ファルコンブリッジ：それならお前たちの死体の上を歩こう。
そしてお前たちが出した血の澱んだ溜りを進もう。
ショア：　お前の脅しは分かっているが、風としか思っていない。
葦を揺らす力もないのだ。
スパイシング：　しかし俺たちはちょっと前に門を揺らし、
城壁をアイルランドの沼地のように動かした。
チャブ：　そうだ、お前たちを非常に怖がらせたので一人も
ビショップゲートのマウス亭までワインを持って
来なかった。本当だとも。
ジョセリン：　そうだ、その後の経緯は知っての通りだ、しかじかと。
スパイシング：　「しかじか」か。そこにいるのか。思うに、
ネビルの名誉ある兜飾りの黒い牛が
途中で話しを折り、話すことさえ
お前に忘れさせるのだろう。
ショア：　いや、それではロンドンの紋章を見ろ。
そこには血のついた剣がある。
それでファルコンブリッジのような反逆者は、
裏切り行為に当然の報いを受けるのだ。
それを見て恐怖で震えないのか。
法律官：　それが次々と布告されてから、

反逆者は我々と闘って上手く行くことはない。
スパイシング：　指揮官と兵士たち、これ以上話すことはない。
言いたいことは厳しい一撃で示そう。
ファルコンブリッジ：出撃の合図を鳴らせ。
ロンドン市長：　こちらもそうしろ。
正義のあるところに勝利はあるのだ。
ジョセリン：　待て、もっと忠告を聞け。さて同胞諸君、あなた方が
従っているファルコンブリッジはどういう人間だろう。
教えることはできるが、私の気持ちは分かるだろう。
ファルコンブリッジ、これらの粗野な人間たちは何だ。
壊れやすいガラスに信頼を置いているようなものだ。
教えようか。いやあなたは十分に賢明だ。
ヨーク家のエドワードが遅れており、だから彼はここに
来ない、とあなたは言う。そのように想像していろ。
ロンドンの町は弱い。その意見をずっと持っていろ。
あなたの口実はヘンリー王の解放だ。
本当だ、だが方法は。あなたに明言しよう。いやすまい。
後はどうなるか。闘うだろう。まったく、自由にしろ。
これ以上あなたには忠告を与えまい。
ファルコンブリッジ：この挿入語句野郎[18]、どこかに行ってしまえ。
クロスビイ、お前の部下を勇気づけろ。この草原で
どちらの大義が正しいか、すぐに決着をつけよう。
ロンドン市長：　お前が望むように私も準備している。
神の名にかけて、闘いを始めよう。

彼らは闘う。反逆者たちが市民を後退させる。そして
ファルコンブリッジとスパイシング登場。

ファルコンブリッジ：この闘いは上手くやった。スパイシング、聞いてくれ。
市民たちはこのように後退して、
幾分怯んでいるので、エセックス出身の
兵士をつれて、それも大急ぎで、
多分できると思うが、この場を離れて、
ロンドンの門と市民らの間に行ってくれ。
スパイシング：　おお、勇敢なトム・ネビル、勇ましいファルコンブリッジ。
お前の考えている策略はわかる。
これが戦略だろう。お前がここにいて、
マイルエンドグリーンで闘っている間、
前もって先発者として、誰もいない通りやすい
通路を作るばかりか、最高の商人の家に
我々と家来を受け入れるようにしておくこと。
その戦法に誇りを持つ、お前の正しい命令を

実行するのにのんびりとはしない。
ファルコンブリッジ：それでは行ってくれ。行ける時に後を追う。
疑うな、今度は我々の勝利であることを。

いくつかの戦闘のあと、ロンドン市長とショアが登場。

ロンドン市長：　前に失ったものを取り返した。
そして天は我々の大義に味方している。
だが、たった今の闘いで私は気付いた。
反乱軍の一部が、どの場所か、
どのような意図か分からないが、
派遣されており、最悪の事態が疑われる。
相手側は我々を囲んで挟み撃ちにするか、
あるいは我々の門を奪うつもりのようだ。
だから我が従兄弟、ショアよ、あなたの勇気と
忠誠心に信頼を置いているので、
三百人の弓隊と何人かの槍兵と共に
すぐに相手の攻撃を迎え撃ってくれ。
ショア：　分かりました。閣下、その効果は
相手の思惑を挫くと思います。　（退場）

出撃の合図の後、鼓手と何人かの兵士とともに、スパイシング登場。

スパイシング：　さあ来い、仲間たちよ。俺たちは今夜王になる。
黄金の盃で痛飲し、商人の妻と寝よう。
妻たちの夫は戦場で命を落とすのだ。
俺たちは今ちょうど敵の背後にいる。
そして行く手には全く何の障害もない。
そして俺たちは町を乗っとるわけだ。
気狂いの悪漢たち、これは待ちに待った瞬間だ。
指揮官に従え、そして決然としろ。

門から入ろうとして進んで行く時、ショアと彼の兵士たちが出て来て、追い払う。
反乱者たちが敗走した争いの後、ロンドン市長、記録官、ショアが登場。
使者がロンドン市長と話している。

ロンドン市長：　さあ、良き友よ。陛下に知らせて下さい。
反逆者たちは全て敗走して戦場から離れ、
今や陛下は勝利を手にしておられる、と。
（使者退場）
整列をして、きちんと並びなさい。
この勝利にもっと栄光を加えるために。

陛下自身がここに来られます。
何と大きな栄誉をあなた方は本日得たことだろう。
神の助けと我々自身の力だけで、
王や他のどんな助けがなくとも、
我々は我が国の敵に二回も勝ったのだから、
ロンドンがどれほど末長く有名になるであろうか。
神が我々を援助してくれたことに感謝したい。
神は苦しい時いつも忠実な臣下を助けてくれる。

トランペットの音、その後、エドワード王、ハワード卿、セリンガー、従者登場。

エドワード王：　ロンドン市長はどこにいる。
ロンドン市長：　陛下、ここにおります。
立派な国王陛下の面前では、
支配力も威厳も持っておりません。
ただ全てを陛下の足元に捧げます。
驕り高ぶった反逆者たちが敗走して逃げたので、
疑いもなく今はもう我々を悩ますために
彼らが進軍することはない、という
最も幸せな結果とともに。
エドワード王：　私生児のファルコンブリッジを捕えたか、
あるいは息の根を止めたのか。
ロンドン市長：　陛下、どちらもしておりません。
我々は精一杯働いたのですが、
彼やスパイシングを捕えることは、
我々の務めとしては重かったようです。
しかし何人かは捕えていますし、他のものは
陛下の恩情にすがり、処分を待っています。
エドワード王：　有り難う、立派なロンドン市長。緊急の事態に、
あまりにも遅れたことを非難しているであろう。
だが王の言葉にかけて確かに保証しよう。
軍隊を集結させたらすぐに、ぐずぐずしないで、
私はできるだけ急いできた。
ファルコンブリッジや反乱の共謀者たちについて、
どのような命令を発したのか。
ロンドン市長：　失礼ながら陛下、我々は次のように告知しました。
生きていようと死んでいようとファルコンブリッジを
連れて来た者には千マルクの賞金を与える、と。
スパイシングにも同じ金額にしました。それ以下の者には
より低い金額を設定しています。
エドワード王：　よくやった。
この賞金は国庫から払うことにしよう。

この件はこれまでとし、そなたらの件に移ろう。
これらの戦闘で立派な働きをしたそなたらに。
つまり大きな結果をもたらした戦闘のことだ。
跪きなさい、そしてそなたら全てが戦場で得た
名誉を戦場で受けなさい。

剣を抜いて、彼らを騎士とする。

立ちなさい。ジョン・クロスビイ卿、ロンドン市長であり騎士。
ラルフ・ジョセリン卿、騎士、立ちなさい。
立ちなさい。トマス・アースウィック卿、法律官であり騎士。
さて、誰がショア親方か教えてくれ。
ロンドン市長： この者がそうです、陛下。
彼はファルコンブリッジと一騎打をしました。
エドワード王： ショア、跪きなさい。彼の名前をどのように呼んでいるか。
法律官： 陛下、彼の名前はマシュー・ショアです。
エドワード王： ショア。
何故、跪いて王の手からそなたの
権利を受けないのか。
ショア： お許し下さい、仁愛深い陛下。
陛下の高貴な恩恵を軽蔑するとか、
嫌悪しているのではなく、
己の無価値を知っているからです。
ロンドン市長や威厳のある法律官殿のような
高貴な方々と一緒に昇進しようとすることは、
マシュー・ショアの考えから程遠いものです。
陛下の注意がほんの少しでも注がれる
何かを私が成し遂げたとしたら、
それで十分ですし、それ以上望みません。
これ以上のものは望まないとしておいて下さい。
エドワード王： そなたの望むようにしよう。何か他の方法で、
そなたの功績に報いるよう工夫をしよう。
私の名誉にかけて、必ずそうしよう。
さて、そなたたち全員に話したいことがある。
そなたたちと最後に会ってから、私は結婚した。
この困難な時にそなたたちを助けるために、
突然、花嫁を置き去りにしてきた。
しかし、全てのことが順調に行っており、
これ以上悪いことが起こりそうもないので、
そなたらに恩恵を施す意味で、
少し私を送ってもらいたいと思う。
市長、どうです、そうしてもらえますか。

ロンドン市長：　我が国王陛下が臣下を命令通り
できないことを、神よ、禁じ給え。
ジョセリン：　確かに、禁じ給え、か。真面目に言って、陛下はいつも
我々が準備していることがお分かりでしょう、しかじかと。
エドワード王：　それでは、出発しよう。紳士たち。
さて、ロンドン市長、話したいことがある。　（退場）

2幕3場　（同じ場所）

ファルコンブリッジとスパイシングが手に武器を持って登場。

スパイシング：　お前が海で引き出した勝利を、名前の恐怖で
全ての人の心をいっぱいにした男か。
お前は俺たちが思っていたネビルか。
お前は私生児ファルコンブリッジというしらみだ。
お前は私生児より卑しい、その生まれには
奴隷の残滓があらわれているからな。
さあ、話してくれ、腐った羊の肝臓、
お前の誘惑で、この道を進むように
連れて来られて、多くの素晴しい山々が続く
というお前の約束の後に、
これがお前のくれる最高の慰めか。
お前は死で俺たちの不注意な足を罠にかけ、
不名誉という絞首台に連れて来て、
今は工夫して助かる道を探せというのか。
いいや、臆病者。俺が捕まると分かったら、
俺たちを間違った方向に連れてきたお前に
この手が復讐するまでは一歩も動かないぞ。
ファルコンブリッジ：下品な奴。馬小屋の糞のような奴だ。
お前は馬をどのように引くかしか考えず、
男らしさなど夢にも思ったことはなかった。
俺が決意の炎を吹き込むまでは。
そのお前が、不幸の原因ともなったお前が、
私を非難しようとするのか。
お前や仲間たちが俺と同じように頑張れば、
勝利は俺たちのものであり、今勝利で笑っている
ロンドン市民も涙を浮かべていたはずだ。
だが、そのような臆病な奴隷たちの援助では、
ライオンも難破しても不思議ではない。
あたかも時折撤退することは、王にとって
偶然でもないかのように。俺の場合は再起不能。

お前の愚かな頭で、俺の負けをどのように
解釈するかを教えないでくれ。
それよりすでに逃亡した奴らと一緒に逃げろ。
さもないと残って、首以外は全てつり下げろ[19]。

スパイシング：　スパイシングという征服者の名前への偏見だ。
その勇気はオールドゲートの石や鉄棒に
俺の剣がつけた切り目が、市が存在する限り
示すことになるであろう。
俺が怯んだ、だと。鞭を食らわないと
怒りを発揮することはない、だと。
ファルコンブリッジ、この中の最低のことでも
傷が和らぐまでは血を見ることになるぜ。

ファルコンブリッジ：行け、悪党。俺の決意を試すな。
ファルコンブリッジの中に残っている勇気は、
このような卑しい奴隷とは会いたくもない。

スパイシング：　俺の剣の純粋な鍛えにかけて、
その剣を握るこの高貴な肉体と血にかけて、
半白のひげを持った市民たちと闘って
俺が最近勝ちとった名誉にかけて、
別れる前に決着をつけよう、
どちらが間違って相手を非難しているか、
どちらが立派な人間であるか、を。

ファルコンブリッジ：絞首刑執行人の仕事を減らしてやろう。
このように厳しく非難されるよりは、
鷲はあえて腐肉をあさることになる

彼らは闘い、チャブ登場。

チャブ：　やめろ、男なら。もし男でなければ、反逆者であり
力の強い泥棒のままでいろ。宣告の知らせを持ってきた。
ファルコンブリッジやスパイシングの首を持ってきた者は
誰でも千クラウン与えると国王は宣言した。
ほらを吹くのはどういう料簡だ。自分のことを考えろ。

スパイシング：　（傍白）この宣言は丁度いい時に来た。
ファルコンブリッジを負かして、
この剣で首を切り、国王に持っていこう。
俺は反逆者の罪を許されるばかりか、
約束の千クラウンが貰えることになる。

ファルコンブリッジ：（傍白）この悪党は俺の命を守る定めであった。
と言うのは、今、こいつをやっつけて、
首を持って国王に降伏しよう。
国王としての言葉が俺を許すと発せられる。

俺がこの反逆の頭目ではあったが、
こいつを王との和解の手段としよう。
チャブ：（傍白）二人を敵に売る方法を知っていたらと思う。
ファルコンブリッジ：どうだ、スパイシング。降伏するか。
生きていようが死んでいようが、お前を
エドワード王のもとに連れていくと誓った。
スパイシング：俺もお前と同じようなことを誓った。
この矛盾はどのように帳尻を合わせようか。
チャブ：俺も二人と同じようなことを誓った。
ファルコンブリッジ：さあ来い、すぐにお前の心配を除いてやろう。
スパイシング：お前がくれるものが分け前となろう。

粉屋登場。

チャブ：粉屋がやってきた。この争いを止めるのを手伝ってくれ。
二人は反逆者で、ファルコンブリッジとスパイシングだ。
二人のうち最悪の奴は、千クラウンの価値がある。
粉屋：たまげた、そんな賞金は俺でも欲しい。
降伏しろ、降伏しろ。争っても無駄だ。
（ファルコンブリッジ退場）
スパイシング：やあ、お前は誰だ。
粉屋：お前を捕まえるものだ。
だが逃げて行った奴は誰だ。
チャブ：粉屋、逃げたのはファルコンブリッジだ。
そしてこいつがスパイシングで、彼の仲間だ。
スパイシング：粉屋、お前に言うが、お前は最も正直な
キリスト教徒が取りかかる最も慈悲深い行為を
妨害する手段となっている。
チャブ：お前は俺の証人になれる。俺は彼を除いて、
最も悪名高い反逆者を捕えた、と。
粉屋：だが俺はお前を捕まえた。世間の人はスパイシングが
最上の人間と同じくらい悪い奴と知っている。
スパイシング：いや、お前は間違っている。俺は忠実な臣下だ。
チャブ：粉屋、こいつは嘘をついている。しっかり押さえつけろ。
スパイシング：お前が俺を非難するのか。こいつも捕まえろ。
こいつはどんな人間よりも悪漢だ。
粉屋：さあ、ロンドン市長の前で、お前たち一緒に答えろ。
市長がこちらに来られる。

ロンドン市長、ジョセリン、従者達登場。

ロンドン市長：ラルフ・ジョセリン卿、エドワード王以上に

愛想のよい王に会ったことがあるか。
途中で何と楽しい話を王はしたことか。
ジョセリン： 閣下、全くそうです。立派な王になるでしょう。
だがどうした。こいつらは何者だ。
粉屋： 神よ、閣下を守りたまえ。
ロンドン市長、ここに二人の反逆者を
差し出します。私が粉引き小屋で
働いている間に見た奴らです。
誠実な人を家から追い出していたので、
彼らを浮浪者で怠惰な悪漢と思って、
治安を維持するために来ました。後になって
一人は私生児ファルコンブリッジだと分かり、
こちらが仲違いしている[20]仲間と分かりました。
一人は捕まえようとしましたが逃げました。
もう一人は閣下の命を待ってここにいます。
ロンドン市長： こいつは反逆者スパイシングだ。
スパイシング： 本当にそうだ。
お前は盲目でないので、俺を知っているはずだ。
ロンドン市長： 粉屋、臣下としての役割をよく果たした。
王によって公けに言われた
報酬に価する働きだ。
だが、こいつは誰だ。顔は見たことがある。
思うに、こいつも反逆者の一人だ。
粉屋： 実を言いますと、私が二人を捕えました。
こいつは取り押さえる助けをしました。
チャブ： それは本当です。私はチャブで、ろうそく屋です。
反逆者たちの顔を見た時を呪っています。
彼らがいなければ、故郷で正直な人間として生き、
こんな状況に至らなかったでしょう。
スパイシング： 黙れ、悪党、死が恐ろしいから撤回するのか。
そうだ市長、俺がお前の喉を切ろうとした人物だ。
喉を切ることに失敗したが、それは否定しない。
お前ができる最悪のことをしろ。
ロンドン市長： こいつを連れていけ。軍法で裁こう。
我々が当たる一番近い木で絞首刑にし、
世間からみじめな奴を取り除こう。
粉屋、お前の行為は千マルクに価する。
その金はお前とスパイシングの正体を言った
こいつと分けねばならぬ。そしてお前、
お前の命が助かるのは、スパイシングを
絞首刑にすることが条件だ。
どうだ、それをするか。

チャブ：　するかだって。そいつは何という質問だ。命が助かるなら、
こいつが親父でもしばり首にする。
ロンドン市長：　それなら仕事が終わったら私の家まで来い。
そこで本当に報酬を渡してやろう。

ジョセリンと従者を連れて、ロンドン市長退場。

スパイシング：　それではお前が俺の死刑執行人というわけか。
チャブ：　本当にそうだ。上司の罪のために。
スパイシング：　可愛いピムによろしく伝えてくれ、そして彼女に
俺のズボンを質受けしてくれと言ってくれ。
ズボンは十一ペンスで「ブルー・ボア」にある。
女主人がそれ以上の金を請求したら、
「お前は呪われた売春婦で、計算間違いだ」と言え。
チャブ：　質入れしたズボンのことなど考えるな。
しらみだらけで、質受けする価値もない。
スパイシング：　俺の心から離れない巡査がいる。あいつは俺から
剣を奪った。その夜、ブラック・ラルフを殺して
おくべきだった。生きていたら、あいつには会いたかった。
チャブ：　ああ、しかし、縛り首になればそんなことはどうでもよい。
スパイシング：　ブラック・ルース、元気なベス、大柄なケイト、その他
男の肉体の可愛いごちそうによろしく伝えてくれ。
小舟やボート、釣舟や帆船、ターンブル通りや
スピッタル病院よ、さらば。俺は男らしく死んで行く。
チャブ：　おお、指揮官スパイシング、お前の愚かな誘惑が、
俺を商売から引き離し、
立派なろうそく作りからこの苦労するところへ、
つまりは反逆者となった。
だから、ネッド・スパイシング、お前の誘惑をやめるため、
これがお前の希望に違いない。
お前の仲間の一人が、絞首刑台に連れて行き、
お前をしばり首にすること。

（退場）

3幕1場　田舎

タムワースの皮なめし職人ホブス登場。

ホブス：　ダジョン、聞いているか。俺のメス馬ブロックを見張って
おけよ。ダンに乗って丘を優雅に静かに降りろ。お前が
生垣のそばを通る時、イバラが牛革の笛を裂かないように

気をつけろ。はあ、何と言っているのだ、お前は。牛革が
落ちているって。もう一度上げろ。俺の知ったことか。
踏越し段で会って、きちんとするのを手伝ってやる。
しかし神よ、助けたまえ。ねじれた世界、無駄使いする
世界だ。靴を持たない人は新しい靴が買えない時、古いものを
修理するため、革のつぎ切れを買うよりは裸足で歩いている。
あいつらは酒を飲んで居酒屋で長く坐っているので修理をする
時間は十分にある。神よ、あいつらを改心させてください。
神よ、改心させてください。さて、俺という職人の側に、
革の小袋、得たもの、消費したもの、取ったもの、失ったもの、
計画しているものがある。俺の収入は消費よりも多い、
だから貯えが残っている。俺は少ししか使わない。
二匹のやせ馬、困窮者のために少し寄付をし、
安い一杯のビール、俺と使用人に安いケーキなどで
使う。十枚の牛革ではいくらになるか…。

乗馬用のムチを持ち、覆面を外しながら、王妃と公爵夫人が登場。ホブスが前に出る。

一体、誰が来たのか。フェリス夫人か、何とか夫人か。
ジョン・ホブス、財布を片付けろ。金は美女を誘うのだ。
公爵夫人： いいところで会った。あなたは鹿を見なかったか。
ホブス： 俺の心だって[21]。神よ、心を見せないようにしてください。
公爵夫人： あなたの心ではない。鹿だ、鹿のことを聞いているのだ。
ホブス： 大切なものを聞いているのか[22]。実を言えば、とうもろこしと
牛革だ。それに俺の娘ネルのように可愛い女性。むしろ
彼女と俺が一緒にキスできるくらいの大きい
ベンド革[23]がほしい。
公爵夫人： 森を降りて来たのか。
ホブス： そうです、ご婦人。降りてきました。
公爵夫人： 口に泡を吹いた鹿を見なかったか。
ホブス： 俺のフードにかけて言うが、笑わせてくれますな、何と、悪魔だ。
そんな馬鹿らしく話しかけるのは俺を好きということか。
父の魂にかけて、キスしておけば良かったと思うよ。
猟師 1： どうしたホブス。公爵夫人と王妃に生意気な口を利いて。
ホブス： 思うに大した王妃だ。この人たちはただの女だ。しかも
一人は俺の娘のようだ。娘のボロ服を着ればと思う。
荷物いっぱいの毛織物や角、それに大量の革をやろう。
それできっと判事と結婚させよう。
猟師 2： 黙れ、皮なめし職人、王妃に許しを乞え。
ホブス： あなたが王妃ならどうかお許しください。王妃様。
王妃： 気にするな、友よ。奥様、弓をとって、
持場で放ちましょう。

公爵夫人：　さあ、弓をひけ、そして鹿の群を連れて来い。

（王妃、公爵夫人、猟師たち退場）

ホブス：　（一人で）神よ、王妃たちに良い持場、良い猟、そして肥えた
肉を与えよ。見なさい、全ての婦人が黒い面をしていれば、
同じように見えるかどうか、を。俺は正直な皮なめし職人だから、
王妃をフェリス嬢と間違ったのだ。

セリンガーとハワードが緑の服を着て登場。

静かに、誰かここに来る。もっと多くの悪人どもか。

セリンガー：　おい、そこにいる人。王を見なかったか。

ホブス：　いや、俺は王に会っていない。どちらの王のことを
聞いているのだ。

ハワード：　エドワード王だ。他には誰か王がいるか。

ホブス：　もう一人王がいるが、思い当たるだろう。
ハリーという名前だ。聖母にかけて、
ハリーのほうが正直だという噂だ。

セリンガー：　こら、反逆的な言葉を言わないように気を付けろ。

ホブス：　言ったらどうなるのだ。

セリンガー：　絞首刑になる。

ホブス：　犬死にだな。俺はそれに頭を突っ込まない。本当に、
反逆的な言葉をいつ話すか話さないか分からない。
二人の王の間では、正直になれば、どちらかの気分を
害すし、ためらうところがある。神が二人を
王にすればよいと思うよ。

ハワード：　そうか、お前は王を見なかったのだ。

ホブス：　見なかった。王は田舎にいるのか。

ハワード：　ドレイトン・バセットで狩りをしておられる。

ホブス：　そいつは悪魔だ。神が悪魔の手際良さを祝福するように。
女王だという女に会った。彼女は娘によく似ているが、
俺の見る限り、娘のほうがきれいだ。

セリンガー：　さようなら、王を褒めておいてくれ。

（ハワードとセリンガー退場）

ホブス：　（独白）神よ、王を正直者にしてください。王がよい噂を
されることを願う。本当に、ある人は王に厳しい
言葉を与えている、あてはまるかどうかは別にして。
王のことは王に心配させよう。俺は牛革の心配をしよう。
世間のことは関係ない。

変装してエドワード王登場

肥やし車の悪魔。何と騒々しい奴らが大挙して田舎に

来るのだ、王が近くにいるから。神よ、俺をこいつから
離してくれ。こいつは泥棒に似ている。宮廷人の間では、
誰が本当のことを言っているか分からない。
エドワード王： おーい、そこの人。[ホブスが行こうとする] どうか待ってくれ。
ホブス： そんなことはできない、俺は急いでいるのだ。
エドワード王： お前が善良な人間なら、答えてくれ。
ホブス： お前が狙うのは俺の財布だ。俺は善良な人間じゃない。
お前もそうでないことを神に祈る。
エドワード王： 何故だ。お前は善良な人間が嫌いか。
ホブス： 嫌いだ。善良な人間が泥棒ならば。
エドワード王： 俺が泥棒だと思うか。
ホブス： 考えは自由だ。それにお前は俺の聴罪師ではない。
エドワード王： お前に危害を加えようと思わない。
ホブス： それはお前しか分からない。（傍白）神にお前が財布を
狙っていないことを祈るよ。
エドワード王： 絶対に、お前に何もするつもりはない。
ホブス： お前の誓いを聞いたのでここにおろう。さて何が言いたい。
手短に言え。次の踏越し段で、仲間が待っている。
エドワード王： 王がこの辺で狩りをしている。陛下を見なかったか。
ホブス： 陛下だって。どういうことだ。陛下の馬かメス馬か。
エドワード王： ちぇっ、陛下ご自身だ。
ホブス： 慈愛と言うのか[24]。陛下がそれをお持ちだと神に祈れ。
どちらの王のことを聞いているのだ。
エドワード王： そりゃ、エドワード王だ。他の王を知っているのか。
ホブス： それほど多くは知らない。お前には話すが、誰も知らない。
実はエドワード王については聞いている。
エドワード王： 国王陛下に会ったことがあるのか。
ホブス： 聖母にかけて、その言葉は陛下について話した一番
よい言葉だ。陛下は十分身分が高い。だが哀れな
ヘンリー王を低い地位に落とした。
エドワード王： どれほど低い地位に落としたのだ。
ホブス： いや、それは言えない。エドワード王はヘンリー王を退位させた。
それでエドワード王は王位を得た。良きことが沢山あるように。
エドワード王： アーメン。お前の話し方が気に入った。名前を知りたいのだが。
ホブス： 俺を知らないのか。
エドワード王： 知らない。
ホブス： それならお前は誰も知らないことになる。タムワースの皮なめし
職人ジョン・ホブスの名前を聞いたことがないのか。
エドワード王： 本当にこれまで聞いたことがない。だが大変好きになった。
ホブス： お前のことを好きじゃない。ここバセット・ヒースで
財布を盗んで生活している追剥ではないかと思う。
だが俺はお前のことを怖れない。コールスヒル市場の

牛革に俺の金はすべて投資したし、俺の部下と馬は
すぐそばの丘の麓にいる。

エドワード王：　背中に革を積んで踏越し段のところで繋がれた
褐色の馬はお前のか。

ホブス：　俺の馬のブロックだ。それに乗馬用の馬ダンと
使用人のダジョンだ。

エドワード王：　人も他の馬もいない、ただ一匹の雌馬だけだ。

ホブス：　神の青き肉体にかけて、使用人は俺にそんな扱いか。
これで失礼。お前と話していると、革も角も馬も全部
失うことになる。

エドワード王：　待て、待て、おい。お前の褐色の馬が盗まれるより、
俺の馬のほうが盗まれる。隣に繋いだから。

ホブス：　お前の言葉を信じるより、まず見てみよう。

エドワード王：　一緒に行こう。

ホブス：　できれば一人で行きたいものだ。

（退場）

弓を持って二人の猟師が再登場。

第1猟師：　さて、本当に、王妃は上手に弓を打つ。

第2猟師：　公爵夫人も若い時はそうだった。

第1猟師：　年を取ると手が震え、的に当たらず、遠くに飛ばない。

第2猟師：　彼女たちは俺たちにいくらくれたかね。

第1猟師：　ちょうど6枚の10シリング金貨だ。

第2猟師：　王妃は4枚くれた。

第1猟師：　そうだった。公爵夫人は2枚だ。

第2猟師：　俺たちの仕事にこれほど払ったことがあったか。

第1猟師：　来ると言っているが、王が来れば黄金の
雨が降ってくるだろう。

第2猟師：　さて、王はこのあたりのどこかで狩りをしている。
まずは一杯やって、それから王を探そう。

（退場）

王とホブス再登場。

エドワード王：　皮なめし職人、どうかね。お前の馬と俺の駿馬を交換したら。

ホブス：　お前の馬を駿馬と呼ぶのか。俺は上手く乗れそうにもないし、
お前の移り気な馬は俺のなめし革、角、牛革を決して運べない。
だが、もし俺が気が狂って交換したとすると、おまけとして
何をくれるか。

エドワード王：　いや、おまけに価するおまけで、お前のブーツを探そう[25]。

ホブス：　はっ、はっ。おもしろいジグだ。さあ、俺の馬ブロックは
「ハ」「レ」を知っており、俺が「ホー」と言えば立ち止り、
俺を乗せたり下ろしたりする。俺が小便するとこいつもする。

エドワード王：　俺がこの馬の歩きぶりが気に入れば、ノーブル金貨をやろう。
牛革を俺のサドルに乗せて、ドレイトンまで進もう。
ホブス：　俺の行く方向から外れるが、お前を好きになった。
エドワード王：　別れるまでには俺をもっと好きになっているさ。
話してくれ、人は王をどのように話しているか。
ホブス：　王たちについて、という意味かい。俺が話すと、人に
話すのじゃないか。
エドワード王：　今、王が知らないとしたら、俺から話すことはない。
ホブス：　たしかに人は言う。ヘンリー王は非常に「アドバウトリ」な
人間だ、と。
エドワード王：　「ディバウト（敬虔な）」だろう。エドワード王はどうだ。
ホブス：　エドワードは率直な奴で、楽しい仲間で、女が好きだ。
美しいため哀れな未亡人と結婚したと聞いている。
エドワード王：　そのためにエドワード王を嫌いになったかい。
ホブス：　いや、かえってエドワード王が好きになった。俺は無骨な
皮なめし職人だが、俺もきれいな娘は好きだ。
エドワード王：　教えてくれ、どれほど人々はエドワード王が好きなのか。
ホブス：　本当に、貧しい人間は休日が好きだが、時々がいい。
休日があまり多いと人間は駄目になる。それと同じで
時々王に会うのは快いが、毎日では俺たちが貧乏になる。
お前には言うが、俺たちはエドワード王に金を貸すことに
なるだろうと思っている。王は貧乏ではないかと思う。
エドワード王：　王が必要なら、金を貸すか。
ホブス：　聖母様にかけて、貸す。王には貯えの半分を差し出し、
もっと援助するために靴の底革を売りに出す。
エドワード王：　本当のところ、ハリーとエドワードのどちらが好きなのだ。
ホブス：　いやそれは秘密なのだが、もし一方が王位を去れば、
二人とも俺の愛を得ることになる。
エドワード王：　本音を言おうか。ハリーが本当の王だと思う。
ホブス：　そんなアドバイスを受けているのか。ハリーはランカスターという
古い家系の出身で、その子孫[26]は好きだ。
エドワード王：　ヨーク家は憎んでいないのか。
ホブス：　全く憎んでいない。サットン風車と同族なのだ。
俺はどちらの風が吹いても上手くやる。もし王がハリーなら
「ランカスター、上手くやれ」と言うし、もし王がエドワードなら、
「ヨーク、ヨーク、俺の金を貸そう」と歌える。
エドワード王：　俺の気持ちと同じだ。だが、ハリーのほうが正当な王で、
エドワードは王位を奪った愚か者で卑去な人間だ。
ホブス：　違う。お前は嘘をついている。エドワードは十分な知恵と
勇気を持っている。お前は反逆しようと言うのか。
エドワード王：　そうだ、しかし誰に話しているかは知っている。
ホブス：　知っているかな。俺が巡査で、お前の言葉を聞いて、

さらし台に据えなければ誓いを破ったことになる。
エドワード王：　この話しはここで終えよう。ヘンリーに仕えていたので、
彼のほうが好きだ。だが今はエドワード王に仕えている。
ホブス：　主人を悪く言うとはとんでもない奴だな。
おい、名前は何と言うのだ、どんな仕事で、
王はお前に何をしてくれる。
エドワード王：　名前はネッドで、王の執事をしている。王は宮廷の
どんな貴族よりも俺に良くしてくれる。
ホブス：　王は困った奴だな。もっと愚か者だ。今度会うことが
あれば王に話そう。王にはタムワースの貧しい俺の家で
会いたい。
エドワード王：　一緒に宮廷に行こう。王に会わせてやる。何でも王に
お願いをすれば、金持ちになれることは保証する。
ホブス：　俺は宮廷には何の用事もない。牛革と一緒に家に帰ろう。
王が俺の家に来れば、歓迎しよう。
エドワード王：　ある地域だけで革を運び、なめし革を売る商売に
関しての頼み事はないのか。あるいは木の皮や
そんなものについての特許状は要らないのか。
ホブス：　ミサや朝の祈りにかけて、特許状は好きではない。
いいか、昔の坊主のように、特許状を売る奴らは、
人々の罪を買ったり売ったりしているのだ。
そこで彼らは王に犯した罪を取り消しにできると
信じこませているし、金のために現実をより
悪化させている。他にもあるが、それはもっと哀れだ。
エドワード王：　どんな哀れなことだ、ジョン・ホブス。何でも言ってくれ。
ホブス：　本当に、国中の多くの人間に対して善を行うことが
できるものを一人の人間が持っていることが残念だ。
エドワード王：　皮なめし職人、それを俺に言うのか。それでは、くじを作って
お前がドレイトンに行くか、俺がタムワースに行くか決めよう。
ホブス：　くじなんかしないでくれ。俺はお前と行かない。お前が俺の
君主の家臣だから（エドワードはもっと正直な家臣をたくさん
抱えていると思うが）、お前が俺と一緒に来るならば、お前は
ジョン・ホブスから歓待されるだろう。牛肉やベーコン、それに
多分袋入りプティングにも歓待されるだろう。俺の娘ネルが
お前が寝る時、ミルク酒をくれるかもしれない。
エドワード王：　約束だ。行って王に何もなければ、
すぐにお前の家に行く。
ホブス：　ネッド、聞いているか。俺がお前のもてなし役なら、
急いだほうがいいぜ。後塵を拝することになるぜ。
（ホブス退場）
エドワード王：　さようなら、ジョン・ホブス。正直で誠実な皮なめし職人。
平凡な人々が、時代の流れに変化する事物を

観察することで知識を得ることを私は知っている。
そして、もっとも質素な生活も満足と調和していれば、
王侯の強大な立場よりも快適なものだ。

ハワードとセリンガー登場。

どうした。何か知らせがあるのか。
王妃はどこにいる。

セリンガー：　王妃様と母上様は、国王陛下、
ハンフリー・ボウズ卿に二人とも招待され、
そこで宴会をして今晩宿泊する予定です。
そして陛下にも来て頂きたいとのことです。

エドワード王：　トム・セリンガー、私は別の用事がある。
お前や他の従者とはぐれて、
私は皮なめし職人に会った。彼は非常に
楽しい男で、陽気であり、機知にも富むので、
彼の家に客として行く約束をしてしまった。
彼は私が王であることを全く知らないからだ。
従兄弟のハワード、このふざけに不平を言うな。
母上や妻にはよろしく言っておいてくれ。
楽しくやれと言ってくれ。私はこの気まぐれをしたい。
彼女達には適当な時間に食事をして眠らせてくれ。
ハンフリー・ボウズ卿にはよろしく伝えてくれ。
彼には朝食の時に会うと言ってくれ。
今夜は、トム・セリンガーと私は、皮なめし職人のホブスと
夕食をとらなければならぬ。質素なネッドとトムが食事をする。
千ポンドくれても、王でもないしセリンガーでもない。

ブーツを履いた使者が登場し、手紙を持っており、跪づいて王に渡す。

ハワード：　（王が読んでいる間に）陛下が宴会に来ないので、
王妃と公爵夫人は不機嫌でしょう。

セリンガー：　ハンフリー・ボウズ卿はたいそう傷つくだろう。
だが何の目的だろう。王も楽しまれるでしょう。

エドワード王：　お前たち、良い知らせだ。ヘンリー六世が死んだ。
その手紙をよく見ろ。（使者に）さあ、これで酒を飲め。

使者に財布を渡す。

そしてぐずぐずせず、命がけで戻って、
弟のグロスターにこの知らせの礼を言ってくれ。
彼によろしく伝えてくれ。明晩、彼に会おう。

どうだ、ご両人。

（使者退場）

セリンガー：　陛下、たいへん結構ですね。
こんな嬉しい知らせを聞いて楽しいでしょう。

エドワード王：　皮なめし職人のトムといればもっと楽しい。
ハワード、その手紙をご婦人方に渡せ。
二番目の料理（知らせ）で楽しくなれと言ってくれ。
出発する前に会えなかったら、後からゆっくり
追いかけてくるように伝えてくれ。
すぐロンドンに行く。お休み、ハワード。

（退場）

3幕2場　皮なめし職人の家

ホブスと娘ネル登場。

ホブス：　来い、ネル。こちらに来い、娘。手と顔は洗ったか。

ネル：　はい、たしかに、お父様。

ホブス：　お前はきれいにしなければいけない、いいかね。
今夜身分の高い宮廷人、君主の執事のネッドが来る。
粋な若者だが、恋しても夢中になってもいけない。
宮廷人はずるい奴だからな。

ネル：　しません、たしかに、お父様。

ホブス：　神の祝福がお前にあるように、リッチフィールドでの半年間の
学校生活は、この家や土地よりもお前には良かった。お前に
行儀作法を教えこみ、全ての言葉「はい、たしかに」「いいえ、
たしかに」という言葉が入る。きれいなスモックを着ているな。
お前の服装が気に入った。夕食の準備はできているか。

ネル：　はい、たしかに、お父様。

ホブス：　おいしい大麦の袋入りプティング、脂肪の多いベーコン、
おいしい牛の足、固いチーズ、黒パンはあるか。

ネル：　全部、いえ、それ以上あります。ミルク酒を出します。
でもネズミがお父様の固いチーズを駄目にしました。

ホブス：　悪魔があいつらを窒息させろ。いつかの夜には、
あいつらは四分の一ペニー分のろうそくも食べた。

ダジョン：　（中から）ご主人様、ご主人様。

ホブス：　どうした、お前。ダジョン、何を言っているのだ。

ダジョン：　お客が来ました。ヘレンはどこですか。

ホブス：　お客はどのような方だ。

ダジョン：　宮廷人です。一人はネッドで、王の屠畜人と言っており、
もう一人はその友達です。

ホブス：　ネッドで王の屠畜人だって。はは、王の執事だ。
馬を受け取って歩いてもらい、こちらに来るように
言ってくれ。ネル、布を敷いて夕食をテーブルに並べろ。

（ネル退場）

エドワード王とセリンガー登場。

たしかにここにネッドがいる。もう一人傲慢なごろつきも。
ようこそ、ネッド。お前の正直さが気に入った。
約束を守ったな。

エドワード王：　本当に、正直な皮なめし職人、俺はお前との約束は
いつでも守る。どうか俺の友達も歓迎してくれ。

ホブス：　誓って、二人ともタムワースにようこそ。友よ、
お前の名前を教えてくれ。

セリンガー：　名前はトム・ツイストだ。

ホブス：　その名は本当かな。二人とも歓迎するし、
一つのことを除いてお前たちが好きだ。

セリンガー：　一つのこととは何だ。

ホブス：　いや、それは秘密にしておこう。誇りが多くの人を
没落させるのを見て考えるとため息が出る。

エドワード王：　お願いだから、意味を教えてくれ。

ホブス：　たしかに、立派な服装で判断すると、お前たちは
まっとうな生活をしてこなかったと思う。王から貰う
低い賃金や薄い報酬ではこんな立派な格恰はできない。
王からこっそり盗むか、臣下から公然と盗まないと
お前たちの「浪費」[27] は保てるものではない。

セリンガー：　皮なめし職人、お前はそう思うか。

ホブス：　俺がどう考えようと問題ではない。さあ、
夕食を食べよう。ネル、ダジョン。どこにいる。

覆いをかけたテーブルを持って、ネルとダジョン登場。

娘よ、俺の友達を歓迎してくれ。

ネル：　紳士方、いらっしゃいませ。

セリンガー：　有り難う、美しい娘さん。（二人がネルにキスをする）

エドワード王：　可愛い娘だ、本当に。

ホブス：　ネッド、娘が気に入ったか。

エドワード王：　大いに気に入ったので、養子になりたいくらいだ。

ホブス：　俺はお前がたいそう気に入っているので、お前が仕事を
持っていれば（奉仕は仕事じゃないし、宮廷人も年老いた
乞食と同じだ）娘をお前にやってもよいと思っている。
お前が宮廷を捨てて皮なめし職人になり、

リッチフィールドの靴屋職人になれば、俺はネルと一緒に
お前に二十ノーブル金貨をやり、商売を立ちあげるために
革の取引を任してもよいと思っている。

セリンガー：　その気があれば、彼はお前に相当良い提案をしている。

エドワード王：　トム、たしかにそうだ。これから彼にもっと話しかけよう。

ホブス：　坐って夕食を食べよう。やめろ、ネル。物欲しそうな
眼をするな。惚れたのか。こいつらは好色な男たちだ。

ネル：　心配ありません、お父様。でも本当にネッドは男前だわ。
トムもいいけど、ネッドは私の目には真珠のようです。

ホブス：　娘よ、ダジョンと彼の仲間たちを呼んでくれ。
お客を楽しませるため、三人で合唱する歌を歌おう。

（ネル退場）

本当にお前たちはどんな宮廷人だ。話しも食べもしない。
宮廷で何かニュースがあったのか。肉を食べてくれ。

エドワード王：　悲しいニュースがあった。ヘンリー王が亡くなった。

ホブス：　明るく楽しいニュースだ。主人エドワード王にとって。

エドワード王：　だが一般人はどのように思うだろうか。

ホブス：　そう、神よ、立派なヘンリー王と共にあれ。
本当に、平民はヘンリー王の死を普通と思うだろう。
死は正直な奴だ。王を容赦することもない。
一人が生まれると他の人は死んで行く。
滅多に前より立派な人は来ない。それだけは言える。

セリンガー：　本当に、上手いことを言う、皮なめし職人。

ネル、再び登場

ホブス：　さあ、ウェットストーン母さんのビールをついでくれ。
友のために乾杯して、俺の話を腹に押し込めよう。
さて、いま、ネッドとトム、お前たちに乾杯する。
俺が宮廷に行くと、知らん顔することだろうよ。

エドワード王：　トムが保証人だ、皮なめし職人。宮廷で歓待するよ。

セリンガー：　ネッド、歓待しなかったら、非難するぞ。

エドワード王：　将来の妻に乾杯しよう。

セリンガー：　たしかに、ネッド。生きて彼女を淑女にしろ。

エドワード王：　ちぇっ、ネル以外に子供がないのに何もくれない。

ホブス：　娘に全てやるために、他に子供がいなければよかった。
だが、息子が一人いる。お前を見るとあいつのことを
思い出す。収入全てをきれいな服や新しいファッションに
費やすお前たちのように浪費家だ。どんな仕事も上手く
行かないから終いには絞首刑になると思う。神よ、
お前たち二人はそんなにならないように。汚いズボンを
履いているな。神よ、立派なファッションだったかな。

かなり金が節約できるだろう。
エドワード王： そのことはおいて、歌を聞かせてくれ。
ホブス： そうだ、そうだ。さあ、ソ、ソ、ソ、ファ、ファ、ファ。
ちょっと、ダジョン。

ここで男性三人合唱の歌を歌う。

アジンコート、アジンコート、アジンコートを知らないか。
そこでイギリス兵は全てのフランス兵を
殺して傷付けた。
銃や褐色の矛で、
フランス兵は打ち倒された、
モリス槍や弓を持ったフランス兵は。
セリンガー： お前たち、上手く歌った。王が聞いていたらな、と思う。
ホブス： 本当にそう思う。彼のために一曲歌うべきだな。片付けろ。

ネル、ダジョン、召使いがテーブルを片付ける。

さあ、寝ようか。ネッド、清潔なシーツをやろう。
娘が織った粗いが丈夫な麻だ。そして言っておくが、
寝室にあるポットはきれいな角で、俺たちの商売の
しるしだ。俺たちは曲がりやすい[28]しろめ製の器や
曲がりやすい陶器 は買わない。
エドワード王： ホブス、それはどうでもよい。俺たちは寝ないのだ。
ホブス： そしたらどうするのだ。
エドワード王： ちょうどお前がすることだ。もう夜明けに近いから。
皮なめし職人、元気づけるために有り難う。
宮廷に来ることがあれば、
王の執事であるネッドか、
王の寝室係で俺の仲間のトムを尋ねてくれ。
そうすればどれだけ歓待するか分かるだろう。
ホブス： お前と同じことを言った宮廷人について聞いたことがある。
尋ねて行くと友達に酒を全く飲ませなかったそうだ。
セリンガー： 俺たちはそんな人間ではない。馬を引いてくれ。
出発しなければならない。有り難う、そして元気で。
ホブス： お二人とも元気で。王様によろしく伝えてくれ。
王がここに来られたら嬉しいと言ってくれ。 （ホブス退場）
エドワード王： トム、さあロンドンへ行こう。馬だ、出発だ。
（退場）

4幕1場　サウサンプトン

縛られたファルコンブリッジと首切り斧を持った首切り役人とともに、
海軍副大将のヘンリー・モートン卿とワイト島指揮官が登場。

モートン：　トマス・ネビル。まだ心からの後悔をする幸いな
時間がある。さあお前の良心を漏らせ。
世間にお前の罪をさらせ、そうすると我々が
証人になろう、キリスト教徒として死んだことを。
ファルコンブリッジ：ハリー・モートン卿、何故、俺を糾弾し、
有罪とし、流血の処刑場に連れて来て、
俺が有罪かどうか聞くのだ。その点で
お前がどんな正義を利用していたか
分かる。これがお前の法律か。
指揮官：　我々の意図を誤解している、ファルコンブリッジ。
我々が罪を知らないから聞くのではない。
天がお前の魂に同情するように、
邪悪な犯罪に心からの悲しみを
感じるようにしているのだ。
ファルコンブリッジ：お前たちは何と慈悲深く見えることか。
俺をこのように縛り、処刑場まで連れて来るのは、
愛のためであり、首を切るのも俺への愛に
心動かされて、とまもなく言いそうだ。
悪賢いやり方だ。お前たちのような
人殺しには、殺人鬼のような心を弁解する
口実には欠かないからな。
モートン：　お前を惨殺するだって。海上で海賊を
働いたことを否定できるのか。
ケント州とエセックス州の平民とともに
武装蜂起をして、二度もロンドンを襲撃し、
そこから二度も追い返されたことを
否定できるのか。その時から逃亡して、
フランスと陰謀の手を組んで、
サウサンプトンを焼失しようとしたことを
否定できるのか。これらは罪ではなくて、
無実を証明して、罪を我々に向けようとするのか。
ファルコンブリッジ：ハリー卿、聞いてくれ。我々は話し合うべきだ。
指揮官：　話し合うべきだと、無礼な奴、何の話し合いが必要だ。
ここにいる副海軍大将と私は、フランス海軍と
遭遇して、ノルマンディの船にいたお前を
捕まえたではないか。
それでも無実を主張するのか。
連れて行け。これまでの反逆者と同じように、

正義に基づいて有罪とされた。お前は死刑だ。
ファルコンブリッジ：俺が死ぬことに疑問はない。死なねばならぬ。
だが、脅しは何とも思わないと言っておこう。
醜い死という名前は何とも
思っていないので、もし彼が見えるなら、
彼と闘って打ち勝ち、袖をとって
俺の歯で引き裂いてやり、
ファルコンブリッジに屈服させてやる。
この命、この無価値なもろい生命、
この一陣の風、それをお前たちは、
陪審や法廷や訳の分からないもので、
俺から奪おうと骨折ったが、
この命はたいへん悪い評判なので、
寿命まで生きる価値を全く見出せない。
お前たちは、苦しめるほど残酷には
なれないし、俺も積極的に耐えよう。
モートン：おいおい。お前の退屈な空威張りはやめて、
魂の健全さを考えろ、ファルコンブリッジ。
指揮官：罪を甘受しろ。そして王の許しを乞え。
ファルコンブリッジ：どの王だ。
モートン：ヨーク家のエドワードだ。
ファルコンブリッジ：彼は俺の王ではない。彼は王位簒奪者だ。
運命が俺に機会を与えてくれたら、
この時までに彼にそう話して、
頭から王冠を奪ってやったのに。
モートン：お前は反逆者だ。反逆者の口を閉ざせ。
ファルコンブリッジ：俺は反逆者ではない。ランカスターが王だ。
ランカスターの権利を守ることが反逆ならば、
彼を幽閉している奴らはどうなるのだ。
彼の王笏を盛り立てることが謀反なら、
王位に入りこんだ奴らの罪はどうなるのか。
おお神よ、かつてあなたは彼の頭に香油を塗った。
その神聖な塗油が再び拭き取られることがあるのか。
神は幼少のころランカスターに王冠を与えた。
悪人たちが成人になったら彼を廃位させるのか。
おお許してほしい。俺が罪人に
ふさわしくないほど説諭していたら。
イングランドよ、いつかその愚行を悲しむであろう。
指揮官：お前は時間を無駄に使っている。そして我々を
時間のかかる質問で疲れさせている。終わりにしろ。
ファルコンブリッジ：本当に、全ての王国は終わらなければならない。
名誉や富も全て終わりがある。

自分が最も優勢であると思っている人は、
死ぬともう話の世界に入り込んでいる。
さあ、お前、自分の仕事をしろ。何と、お前の
心は半ズボンの中にあるような顔付きだな[29]。
勇気を奮い起こせ。すぐに終わるさ。
一撃、せいぜい二撃で用事は済む。

首切り役人：　あなたを殺すことをお許し下さい。

ファルコンブリッジ：お前を許すだって。そうだ、お前に何かやろう。
待て、お前が酒を飲むくらいのクラウン金貨がある。

（金を与える）

ちぇ、泣くな。敗北者に不平を語る許しをくれ。
しかし、本当に、俺は敗北を勝利と見ている。
さて、手始めに聞くが、お前の斧は十分に鋭利か。
どうでもいい。神の名にかけて、仕事にかかれ。

首切り役人：　さあ、台に静かに頭を置いて下さい。

ファルコンブリッジ：静かにとお前は言うのか。俺をそんな扱いにするな。
だがそれに関しては皆同じか。お前の持っている力を
お前の手足の全体の均整を使って、
お前の力強い腕に全て呼び出せ。
俺に容赦はするな。俺は紳士だ。
ネビルで、しかもファルコンブリッジだ。
お前の仕事をしろ。それで信用もつくだろう。
上手くできなかったら、率直に言わせてもらおう。
処刑が終わった時に大変怒っている、と。

首切り役人：　保証しますが、この国で私ほど上手くできる者はおりません。

ファルコンブリッジ：さても喜ばせてくれるな。イングランドよ、さらば。
古きプランタジネットよ、生き残ることがあれば、
成功はしなかったが、俺の愛を考えてくれ。

彼が連れて行かれる。

モートン：　彼の首については、すぐにロンドンに
送ることにしよう。彼を捕まえた時に
与えられる約束の報酬は、
サウサンプトンの貧者たちに与えよう。
指揮官、どうですか。何か異論はありませんか。

指揮官：　心から同意します。ところで王にこの情報を
伝えるために送った使者が帰ってこないことに
たいへん驚いています。

モートン：　その推測は止めなさい。使者が来ています。

使者登場。

おい、お前は行動が鈍いようだな。
あるいは我々の状況に無頓着だ。
エドワード王は我々の仕事に何と言っておられる。

使者：　率直にまた簡単に答えますと、
王とは話しませんでした。おられると聞いて
ドレイトン・バセットに行った時、
ちょうどその前夜、王は大急ぎで
ロンドンに行かれたと聞きました。
その訳ですが、ロンドン塔でヘンリー王が
亡くなった事件で、人々が色々な話をしており、
ある人は殺害されたと考えているし、
ある人は自然死だと推測しているからです。

モートン：　しかしながら、それは我々に関係ない。
反逆罪で首を失った彼の死しか、
我々には関係ない。
さあ、以前と同じように指示を与え、
その後に海岸の方へ引き上げよう。　（退場）

4幕2場　ロンドン、市長の家

緋のガウンを着て、腰には金メッキをした短剣を着けて、ロンドン市長登場。

ロンドン市長：　本当に、クロスビイ。この格恰はお前によく似合う。
だが、緋のガウンを着て、腰にはきらびやかな短剣を
着けているので、驚くものもいる。
さて、その人らに教えよう。君主である王に対して
立派な働きをしたので、戦場で騎士となった、と。
だから、宮廷でも、町でも、王主催の宴会でも、
合法的に、これを身に着けることができる。
待て、ジョン・クロスビイ。有頂天になっている。
そしてお前の生まれや素性のことを忘れている。
お前がどこで生まれ、どこから来たのか、を。
ロンドン病院が私の主な養育場所だと
言っても恥ずかしいとは思わない。
そこで私は知った。ある誠実な市民が、イスリントン
近くのカウ・クロスと一般に呼ばれている四つ辻近くで、
偶然に赤ん坊の私を見つけたこと、を。
その人の仕事は貧しい靴職人であった。
私がキリスト教徒かどうか分からないので、
私を見つけたところの名前を付けた。

クロス（四つ角）の近くだから、ジョン・クロスビイだ。
私が成長した時、養育院の先生達は、
私を雑穀商の従弟に出した。
神は私の哀れな努力に祝福を与えられ、
その祝福で今日の私がある。
私を見つけてくれた人には十分に御礼をしたし、
私を養育してくれた場所である養育院には、
年に百ポンド毎年いつもあげている。
同じように、ジョン・クロスビイという名前を
記念して、ビショプゲイト通りに貧民院を建て、
私の名前に因んで、クロスビイ・ハウスと呼んでいる。
そして神が私の命を召された時は、
小規模な聖ヘレン教会に埋葬される。
これら全てのことは、私が生まれを
自慢しないことを明らかにしている。
地で発見されたので、地に帰らねばならぬ。
神よ、これは大変だ。我を忘れていた。
君主である王がもうすぐここに来られるのに、
まだ何も準備していない。
従兄のショアはどこだ。いや、ショア夫人はどこだ。
彼女がこの家に長くいるのは申し訳ない。
男やもめとはどんなものか見るがよい、
こんな危急の時に、市長夫人がいないのだ。

ショア親方とショア夫人登場。

おお、来たか。ようこそ従兄のショア。
だが本当によく来た、立派な姪よ。
そなたは市長夫人の代わりをしてほしい。
助けてくれ。そうでないと末代まで恥をかく。
従兄よ、いつもあなたに迷惑をかけるな。

ショア：　全くかまいません、閣下。それより我らの
粗末な援助を喜んでもらって感謝します。

ロンドン市長：　ああ、彼女は何ときちんと働いていることか。
本当に、彼女は主婦という仕事に輝きを与えている。
私の家内が生きており、きれいなショア夫人が
彼女の家を美しくしているのを見たら、
少なからず誇りに思うことだろう。

ジェーン：　ロンドン市長閣下、大げさな言葉、痛み入ります。
国王陛下にはいつ来られても結構です。
全ては完全に準備が整っています。

彼らはテーブルを運び宴会の準備をする。

ロンドン市長： 我々の信用のためにこのように苦労している
そなたにはいっそう恩義を受けている、姪よ。
私の使用人は本当に要領が悪く、
国王は準備が整う前に来られたであろう。
だが、静かに。陛下が来られた。

トランペットの音。エドワード王、ハワード、セリンガー、従者たちが登場。

エドワード王： やあ、ロンドン市長、約束を守ったであろう。
ここから出発する際、そなたと食事が
できなかったので、ロンドンに戻って
そなたと会えば、最初に食事をすると
約束をした。厚かましい反逆者ファルコンブリッジに
そなたらが成し遂げた大きな功績については、
そなたやロンドン市民たちに、
いつも心からの感謝をしている。
ロンドン市長： 陛下、我々がしたことは、真の臣下が
どうしてもせざるを得ない
義務以上のものではありません。
王や国の名誉を守らない人は決して
生きていないように願いたい。
次に神に感謝します。神は陛下を
このあばら屋に臨席させて下された。
私にとってこれ以上の幸せはありません。
エドワード王： ロンドン市長、有り難う。市長夫人はどこにいる。
彼女からも歓迎の言葉を聞きたいものだ。
ロンドン市長： 今日という祝福された日まで生きておれば、
大きな喜びで歓迎の言葉を述べたでしょう、陛下。
しかし彼女の代役としてこの婦人がおります。
私の従兄弟の妻が代役を務めています。
ショア夫人、何か一言。
エドワード王： 何と、ショア夫人か。私の手から騎士の称号を
受け取ることを拒んだ彼の妻か。
ロンドン市長： 陛下、まさにその婦人です。ここに当人もいます。
エドワード王： 何と、ショア親方。私はまだあなたに借りがある。
だが、神に誓って、その借りを返すつもりだ。
ショアの奥様、今あなたの目の前で、
ご亭主の無作法を非難しなければならない。
本当に、彼は大きな過ちをあなたにした。
彼が騎士になればあなたは貴婦人となった。

彼は失敗した。実際、あなたが受けるべき徳を
妨害したのだから、非難を受けるべきだ。

ジェーン：　陛下、私の貧しくも粗末な思いは、
無価値なものを目指したことはありません。
女性の心は自然に上昇志向であると、
格言のように思っている方もいますが、
この質素な地位を続けておられることに、
神と夫のショアに何と感謝していることでしょう。
同じように、そんなにして頂く陛下の寛容に、
何と陛下を愛していることでしょう。
天よ、私の内心の真の記録を保存してほしい。
ロンドン市長のために、私にふさわしい義務、
この家で陛下を歓待する義務が残っています。
私の言葉にある感謝する力が強いので、
イングランド王は疑うべきではありません。

エドワード王：　疑うことはない、ショア婦人。さてロンドン市長、
エドワードは歓待されていると大胆にも言おう。
本当に上手く歓待の言葉を言われましたな。
だがショア夫人の舌がその言葉を飾った。
従兄弟のハワード、それにトム・セリンガー、
市民がこれほど美しい妻を持ったことがあろうか。

ハワード：　血と肉に関しては、あらゆる点で、
これほど美しい妻を見たことがありません。

セリンガー：　陛下、私もありません。セリンガーが王なら、
ショア夫人を王妃にできるでしょうに。

エドワード王：　どうした、トム。（傍白）いやむしろどうしたネッド。
これはどんな変化だ。誇り高く、生意気であちこち動く
私の目が、彼女は美しいと脳の中で話しかけている。
私は知っているし見ている。王妃よりも美しいと。
それを主張するのか。何と裏切り者の心、
この陰謀と手を握ろうとするのか。
下がれ、反逆者。後退しろ、下品で信用できない思い。
お前を信用しない。王妃エリザベスはきれいだ。
ショアの家内は王妃と較べると乞食女だ[30]。
さあ、坐ろうか。ここに私は座ろう。
ロンドン市長、私にワインを注いでくれ。
あなたの選んだロンドン市長夫人に乾杯しよう。
それからショア親方、どう思うか話してくれ。
ロンドン市長は奥さんを市長夫人にしているが。

ショア：　これ以上良いことはないと思います。陛下。
全て　陛下の名誉のためです。

ロンドン市長が大杯のワインを持ってきて、恭しく跪いて王に渡す。

エドワード王： ロンドン市長、私のために飲んでくれ。そうしよう。
さあ私が言うのだ。飲んでくれ。味見をしてほしい。
飲んでくれ、そしてあなたに乾杯しよう。
ロンドン市長： 陛下に健康と幸福がありますように。
（飲む）
エドワード王： 杯にワインを満たしてくれ。市長夫人、
この乾杯はあなたのために飲むのだ。
そして私にも乾杯して欲しい。だが、
あなたがしたいと思う程度でよい。

王がワインを飲み、トランペットが鳴る。そしてワインが彼女に渡され、飲もうとする。

あなたは誰かのために乾杯して欲しい。そうだ、トム、
お前のためだ。いいか彼女に失礼のないようにしろ。
エドワードが願うのだ。（傍白）神よ、彼女に失礼のないように。
なおも、怠惰な目よ、お前はうろつくのか。
おとなしくしろ。これ以上罪を犯さないように。

使者が手紙を持って登場。

どうした。私に手紙か。誰からだ。
使者： 陛下、こちらがバーガンディ公爵様から、
こちらがフランス総指揮官殿からです。
エドワード王： 彼らからどんな知らせだろう。

手紙を開けて読む。

フランスの権利を主張する、だって。
彼らが応援してくれるそうだ。そなたはどうなのだ。
だが、ここを出る前に、私には他の応援が必要だ。

手紙を読んでいるふりをするが、読んでいる間、ショア夫人を見ている。

私に王冠を授けるか、不幸で殺すかは、
フランスより大きな力を持つ女性の応援が。
貞潔の決意がこの美女を縛りつけておけば、
どのように求愛しても常に断られるのだ。
彼女の夫は彼女にふさわしい人物だ。
ちぇ。愛はどこにあろうと斟酌しないものだ。
王妃に悪いことをしている。美が破滅を求める所、

強要される全ての悪を耐えねばならぬ。
人の目を欺くために、読んでいるふりをする。
人の目がそれを知ったら、軽蔑するだろう。

テーブルから急に立ち上がる。

ロンドン市長、ご馳走ありがとう。気分が悪い。
この知らせをどのように考えてよいか分からない。
つまり、この気分が私の理性を全て奪った。

ロンドン市長：　神よ、陛下を守りたまえ。

エドワード王：　いや何でもない。すぐに良くなる。

ジェーン：　陛下、よろしければ坐ってください。

エドワード王：　（傍白）そなたといたい。私は出立しなければならない[31]。
従兄弟のハワード、手紙を枢密院に渡してくれ。
そして助言をくれるように頼んでほしい。
ロンドン市長、歓待ありがとう。さようなら。
ショア夫人、さようなら。市長夫人と言うべきですね。
この時間に私が立つのはあなたのせいだ[32]。
さようなら、ショア親方。さようなら、皆さん。
この償いをするためにもう一度会いましょう。

（王、ハワード、セリンガー退場）

ロンドン市長：　神よ、災難がここにある。
私の家が王の不興を招いたのか。
従兄弟のショアよ、私は死にたい。

ショア：　閣下、落ち着いて下さい。王は気紛れです。
疑いもなく、王を不愉快にする内容が
手紙にあったのです。

ジェーン：　閣下、私もそう思います。
神の助けで、王の気分もすぐ良くなります。

ロンドン市長：　私もそう願う。さて、従兄弟よ、骨折りには
感謝しかない。特にきれいな姪よ、そなたに対しても。
お願いしたいが、今晩、私と一緒に食事をしよう。
どうだ、するかね。

ショア：　閣下、そうします。
それではここで失礼いたします。

（ショアとその妻退場）

ロンドン市長：　ああ、陛下の突然の病が沢山の感情で
何と私を苦しめることだろう。
陛下は心から楽しもうとされていた。
もし陛下が満足されるのを見たら、
私がどれほど嬉しいか神がご承知だ。
陛下の粗末な器であるロンドン市長が

提供するあわれな娯楽で満足されれば。
私の土地、生命、全てのものはいつも
臣下の義務として陛下のものなのだ。
信じているが、神が陛下の健康を祝福され、
すぐに急な発作を直して下さるだろう。
これらを運んでいけ。

召使いたちが宴会を片付ける。

ここを片付けろ。
そして天の神よ、陛下に祝福を。（退場）

4幕3場　ショアの店、ペリカンの看板

金の板を持って金細工師の店を準備する二人の徒弟が登場。

第1徒弟：　やい、ジャック。来てから準備しろ。
第2徒弟：　お前のほうが年上の徒弟だろう。お前がしろ、奥様が
降りて来られた時にお前を叱らないように。
今　何時だ。
第1徒弟：　オール・ハロウズ教会によれば、六時だ。
第2徒弟：　嘘と盗みは絞首刑になるぞ。
これで全部の金の板か。
第1徒弟：　ああ、今日は十分間に合う。分銅と秤はどこにある。
第2徒弟：　すべて準備している。さあ、行け、奥様が来る。
（第1徒弟退場）

縫物をもって、ショア夫人登場。

ジェーン：　さあ、お前。私が店を見ている間、
職人がカップを発送したか見て来ておくれ。
重さは何オンスになるかね。
第2徒弟：　確か、二十オンスです。
ジェーン：　紳士は型についてどう言っていた。
第2徒弟：　紳士は主人に話しました。私は中にいませんでした。
ジェーン：　それでは急いで行きなさい。親方はチープサイドです。
さぼっていることを見られないように注意しなさい。
（第2徒弟退場）

ジェーンは縫物をして舞台に残る。変装して店の前に王登場。

エドワード王：　王を隠すために、衣装が上手く行くように。
美しいショア夫人、これがあなたの愛を得る。
この変装は人には分からない、そうであることを望む。
毎日宮廷に来る給水係も、私をしばしば見るが、
この服装の私は分からなかった。
人が見ている時、ライオン波止場から上陸したが、
誰も私が王と見破らなかった。
伊達男が壁際を歩こうとしたら[33]、私は大人しく
譲ってやろう。待て、方向を変えねばならぬ。
ここはロンバード通りで、ペリカンの看板がある。
そしてペリカンの巣の中には不死鳥[34]がいる。
おお、豊かな自然の作品の中でも稀にみる完璧さ。
インドの全てより大きな価値を持つ貴重な
ダイヤモンドの光りきらめく輝き。
その優しく愛らしい熱で、我らが価値あると思う石を
大地が作り出すという太陽がなければ、
地に向けられた彼女の輝く瞳が、全ての
小石をダイヤモンドに変えるであろう。
貪欲な目よ、しっかり見なさい。心の欲望が
安住する休息を見つけるまでは満足するな。
ジェーン：　眺めておられますが、何か買われますか。
エドワード王：　あまり高価でなければ、店の最上の宝石がほしい。
まず、あなたが付けているサファイアはいくらですか。
ジェーン：　たしかに本物で、私も保証します。
どんなロンドン宝石商人でもこれ以上のものは出せません。
エドワード王：　同じようなものはない。非常に上手くほめている。
ジェーン：　私がですか。宝石商がこの石を持っていたら、
誰も私が要求する値段以上では買わないでしょう。
思うに、あなたが見た中で一番ピッタリでしょう。
エドワード王：　本当に、私が見た中で一番きれいな手に
はまっている。
ジェーン：　おもしろい方ですね。
でも価値としては国王がしてもおかしくありません。
エドワード王：　本当にそうですか。
ジェーン：　私が言いたいのは、この指輪です。
エドワード王：　私が言いたいのは、その手だ。
ジェーン：　楽しい方ですね。
値切りに来て、買いに来たのではないですね。
エドワード王：　私よりも高い値段を呈示する人には、
この買物の相手が見つからないことになる。
ジェーン：　多分、あまり価値がないものを買うからですか。
エドワード王：　むしろどんな富でも買えないからだ。

ジェーン：　昔、愛のために与えられたものをそんなに
高価に見積もるとは何と愚かでしょう。
エドワード王：　簡単に見つけたのは彼の幸運だった。
ジェーン：　贈り物の価値が小さいので、求められると断れません。
エドワード王：　そんな贈り物を与える彼女は、大地が持っていたものや
世界が持つものより多くのものを与えたのだ。
ジェーン：　あなたの言う通りでしたら、彼は不運です。
あなたが高く評価するものを彼に与えて、
その結婚でいっそう貧乏になるのですから。
エドワード王：　彼がその価値を知らないことが容易に分かる。
ジェーン：　それを長く使っておれば、あなたがあまりにも
高く評価していることがわかるでしょう。
あなたもそう見えますが、彼は商売人ですから。
エドワード王：　本当に、王にしか買えないものに、
誰も冒険すべきではない。
ジェーン：　誰も尊重しないものを王が愛するなら、
そうでしょう。もしくはそんな価値のないものを
王が喜ぶちょっとした理由があると思います。
エドワード王：　満足という王国を買うために王冠を
差し出さない王がおろうか。
ジェーン：　私の意見では、その問題を上手く質問されている。
思うに、世界にはそんな愚かな王はいない。
エドワード王：　ああ、ショア夫人、それをするのが私なのだ。
ジェーン：　私は信じませんが、その人がエドワード王であり、
王冠を提供するとしたら、堂々と話されたものです。
エドワード王：　だが、私は手に入れるだろうか。
ジェーン：　どうして私を知ったのでしょうか。
エドワード王：　ああ、あなたを最後に見た時からだ。
ジェーン：　どこでしたか。
エドワード王：　王の面前で、ロンドン市長の家だ。
ジェーン：　あなたと会ったことを覚えていません。
あまり注意を払わなかった多くの人がいました。
エドワード王：　あなたは私に気づき、少し話しもした。
ジェーン：　あなたの勘違いです。王の世話をしていましたから、
そんな時間はありません。
エドワード王：　それを証明するために、手を与えよう。
私をよく見なさい。

エドワード王が変装を解く。

ジェーン：　お願いです。奇妙な変装のため陛下に
大胆であったことをお許し下さい。　（跪く）

我々が持っているものは全て陛下のものです。
ただし貞操だけは、捧げることはできません。
エドワード王：　エドワードが欲しいのはあなたの愛だけだ、輝く天使。
そのために危険を冒して会いに来たのだ。

ショア親方登場。

ジェーン：　でも私が愛を与えた唯一の人がやって来ます。
思うに、彼は渡さないと言うでしょう。
エドワード王：　（傍白）こんなに早く愛から切り離されるのか。悔しい。
ご夫人、どうですか。私の提案を受け入れますか。
ジェーン：　まったく提案を受け入れることはできません。
エドワード王：　これほど高価な提案はこれからもないでしょう。
ジェーン：　本当に、紳士らしく提案されています。
だが、宝石は売れ残らないでしょう。
ショア：　あまり値段を下げなければ、妻との間の
取引を有利にして差し上げよう。
エドワード王：　（傍白）ああ、立派なショア、「いいや」と答えよう。
（彼に）それほどの宝石をあなたは手放さないでしょう。
その取引であなたは損をすると奥さんは言っている。
ショア：　もっと安く買えるかどうか、金細工師通りを見て下さい。
エドワード王：　多くの世界がこんな宝石を持たないことを知りなさい。
（エドワード退場）

彼が行く時、ショアは王であると気づき、そのことで非常に不愉快になる。

ジェーン：　マット、何故そんな顔をしているの。あの紳士を知っているの。
ああ、そんなに青い顔をして気分でも悪いの。
あなた、気分はどうですか。どこに行っていたの。
ショア：　いや何でもない、ジェーン。あの紳士を知っているか。
ジェーン：　私は知りません、あなた。ああ、何故そんなことを聞くの。
彼はあなたの敵ですか。
ショア：　何とも言えない。
さて、値切るために店に来たのだろうか。
ジェーン：　この宝石のためです、あなた。
ショア：　彼がその他の用事で来ないことを神に祈る。
ジェーン：　彼は誰ですか、あなたが疑わしそうに聞くので、
その人が怪しい人物だと思います、ショア。
ショア：　ああ、ジェーン。あの人は王だ。
ジェーン：　王ですって。それなら、ため息はそのためですか。
たとえ彼が千人の王であろうと、彼の存在を恐れ、
私の愛を疑う理由はありません。

ショア：　疑う理由がないことは知っている。ほら、彼がもう一度来る。

マントで身を包み、王が再登場

エドワード王：　（傍白）まだ邪魔者がいるのか。辛抱しろ、心よ。
もっと適当な時機に苦しみをなだめよう。
さて、ご夫人、私が提供したものを受け入れますか。
買いたいのでもう一度戻ってきました。
ジェーン：　本当に受け入れることはできません。お願いですから、
夫と取り引きして、彼が何と言うか聞いて下さい。
ショア：　あなたのお金の価値の品物を売りましょう。よろしければ、
もう少しこちらに来て下さい。
エドワード王：　（傍白）私はあまりにも近いし、お前も相当近い。
いや、いや、奥さんは私が提案した金額を知っている。
まじめな話だが、それ以上は払えません。
それではさようなら。あなたとは取り引きしません。　（退場）
ジェーン：　あなたは勘違いしています。あれは王ではありません。
王が一人で来るような危険を冒すと思いますか。
ショア：　ジェーン、はっきり言うが、あれは王だ。
神よ、愛と怖れの両極端の間で、何と身震いするような
おこりの中に魂が腰を下ろしているのか。
我々は宝物を秘密にしておくが、これほどの美を
全ての人の視線が注ぐ広い視野の中に
置いておくほど愚かなのだろうか。
おお、裏切り者の美。欺く善よ、お前は
お前自身と愛に対して共謀しているのだ。
美は手に入れるとすぐ他人に欲しがられる。
美の中に美自身を傷つけるものがある。
おお、豊かで貧しい運命、善であり悪。
お前は何と多くの楽しい悲嘆をいつももたらすのであろうか。
ジェーン：　お願いですからこちらに来て、側に坐って下さい。愛しい人。
天の下のどんな王でもあなたほど愛することはありません。
（退場）

4幕4場

ハンフリー・ボウズ卿、アストン親方、二人の治安判事、ハリー・グラジェン、
ロバート・グッドフェロー、ハッドランド親方、ジョン・ホブス登場。

ボウズ：　近隣の方や友よ、あなた方が招集されたのは、
国王陛下に関する事柄のためで、

ご存知のように、先祖の働きにより得た
フランスの王冠と統師権に対する国王の権利は、
フランス人によって不当にも保留されている。
その復讐のために、また正々堂々と取り返すため、
陛下は軍装に身を固める決意をされ、
陛下ご自身が敵に対して、
勇壮な軍を率いることにされた。
今でもその苦しい傷を見ているが、
国内の不和と戦闘のために、
陛下の国庫には金がないので、
忠実な愛すべき臣下の助けを借りて、
正しく偉大な遠征を進めようと願っておられる。

ホブス：　要するに、言わば、長い浄化をかけるという
内容と意味は、ハンフリー卿、ある点では、
もう話すに及ばない。ただ国王はお金が必要であり、
人民の何人かを兵士に欲しいのだ。

ボウズ：　皮なめし職人、お前は正しく事態を理解している。

アストン：　その上に、これが重要だ。国王陛下は、
我々の合法的な王であり尊敬すべき陛下は、
税金を強いたり課したり、また我々が都合できる
以上の金額を借りたりすることもできるが、
―我々の所有物は全て陛下の命令通りだから―
陛下はそうしない。やさしく我々の親切な仁愛に
訴えられている。この力強い訓令に対して、
気持ちよく何を与えることができるか、を。

ハワード卿登場。

それを受け取るために、陛下の高潔な摂政であり
血族であるハワード卿がここに来ておられる。

ハワード：　さて立派なハンフリー・ボウズ卿とアストン親方、
陛下の限りなく寛大な申し出を宣言したか。

ボウズ：　閣下、しました。

ハワード：　陛下は借金や貢物として
強制するのではなく、感謝をして贈り物を
受け取り、愛に報いようとされている。

ボウズ：　今お金はあまりないが、陛下への愛を示すために、
百ポンドを陛下に差し上げよう。

ハワード：　それはよい。ハンフリー卿。

アストン：　私は百マルクだ。

ハワード：　有り難う、アストン親方。二人とも愛を示している。
さて近隣の方はどれほどくれるか聞いて下さい。

ボウズ：　さあ、ハッドランド親方、あなたの仁愛を[35]。
ハッドランド：　親切なハンフリー卿、私の財布から搾り取らないでほしい。
私の状況を知っているはず。最近土地を売ったのです。
アストン：　それなら金はあるのだな。陛下に一部を差し上げろ。
ホブス：　そうしなさい、そうしなさい、ハッドランド親方。噂では
不正な取引で汚い土地をきれいな金と銀に換えたそうですね。
金がある間に、今国王に差し上げなさい。しばらくの間
置いていると、全て使ってしまう。土地は堅固に根付くが、
土地を保持できない人は金を持っておくのは苦労するものです。
金は持ちにくいし溶けやすい、本当に溶けやすい。
ハワード：　有難いことだ、皮なめし職人。
ボウズ：　（ハッドランドに）どれくらいもらえるかな。
ハッドランド：　四十シリングだ。
アストン：　ロバート・グッドフェロー。
あなたは王に気前がよいことを知っている。
グッドフェロー：　アストン親方、落ち着いて下さい。お願いですから。
あなたは私の出費を知っている。家族が多いので、
家計費が私をほとんど裸にしています。
六十人もの家族を養っているので、
年間かなりの食費を費やしています。
二つがいのグレイハウンド、二十組の猟犬、
そして馬はかなりの穀物を食べます。
クリスマスの費用もあるし、家に来る友も、
かなり金がかかります。私はロビン・グッドフェローで、
全ての人を歓迎し、楽しい家庭を作っています。
全く金がありませんので、どうか許して下さい。
ハワード：　素朴な皮なめし職人が金持ちになる方法を教える。
あまり犬を飼わなければ人を養うことができる。
怠け者に食べさせることはない。必要のない経費だ。
猟犬や猟仲間に金を使うお前は
必ず王にいくらか金を差し出すだろう。
グッドフェロー：　二枚のエンゼル金貨[36]で、本当にこれで全部です。
ホブス：　確かに、犬がこんなに残したのだからいいでしょう。
犬がお前の家と土地をまもなく食いつくすだろう。
ボウズ：　さて、ハリー・グラジェン。
グラジェン：　何を私から欲しいのだ。金なら一銭もない。
在庫品は売らない。前からの人頭税、寄付金、
十五人分の一税、割り当て兵士があり、貧民への負担だ。
やりたければ俺を戸外へ追いやってもよい。
ホブス：　偉いさんたち、聞いてくれ。近所のグラジェンに答えさせて
くれるかな。聖なる遺物にかけて、ハリー・グラジェン。
お前は全く不平ばかり言うけちな田舎者だ。お前は

二つの畑を持って、子供もいない。お前はどっさりと金を
持っている。さあ、金を吐き出せ。お前は十分の一税の
ガチョウのために、司祭と一緒に法廷に行くのに、国王には
四、五ポンドも差し上げないのか。

グラジェン：　ちくしょう、善人ぶる皮なめし職人。遠慮なく言って
くれるな。お前の浪費が息子を危うく絞首刑にする
ところだった。他人の出費だから率直に言えるのだ。

ホブス：　お前は正直な男じゃない。息子を使って俺をなじるなんて。
息子は何をしてもお前よりは長生きする。息子は牢にいる。
牢に入っているのは彼が初めてか。お前は野獣だが、
人間だったら、手荒くお前を扱ってやるのに。（泣く）

ハワード：　息子の罪で父親を非難するとは教育がない、お前。
我々はそのためにここにいるのではない。
国王のためにいくら喜捨するのだ。

ホブス：　彼の喜捨だって。しばり首にしろ、こいつは一文だって
喜んで払わない。

グラッジェン：　四十ペンスだったら払ってやってもよい。

ハワード：　ああ、けちで粗野な奴。卑しくて教養のない田舎者。
これが国王に対して抱いている愛か。
皆さん、この男には注意しておいてくれ。
彼が罪を犯したら、十分に罪をかぶらせるように。
さて、陽気な皮なめし職人、どれくらい提供するか。

ホブス：　二十枚の古いエンゼル金貨と二十枚の皮革。
少なければ、あと二十ノーブル持っていくように。
私が持っている間、国王が私の蓄えを使ってもよい。

ハワード：　国王に愛すべき気前良さをお知らせしよう。

ホブス：　本当に知らせてくれますか。心から感謝します。
ところで紳士諸君、宮廷から来られたのですか。

ハワード：　そうです。

ホブス：　ああ、国王はお元気でしょうか。国王の執事であるネッドと
部屋係のトムはどうしていますか。彼らをご存じと思います。

ハワード：　二人とも元気にしている。

ホブス：　身分の高いお客がなかったので、一晩我が家に来てもらった。

ハワード：　そのことは知っている。

ホブス：　娘のネルにキスするためにもう一度来ると約束してくれました。
今、あの人達を験す好機だ。息子はケーパードッキイの
ディベルというところで牢屋にいる。人の財布を盗んだ罪で。
国王の同情がなければ死刑になる。執事であるネッドは、
国王に対して何ができますか。

ハワード：　私よりもできるし、誰よりもできると思います。

ホブス：　何と、彼はできるのだ。本当にその言葉を聞いて嬉しい。

ハワード：　宮廷に来なさい。息子の命は保証する。

ネッドが息子を救うし、それ以上のことをしてくれる。
ホブス：　馬の子供ブロックを乳離れさせて国王に会いに行こう。
よほどのことがない限り、太ったニワトリ二羽を
あなたにあげよう。
ボウズ：　閣下、グラジェンは喜んで五ポンドくれますので、
無作法な言葉は許してやって下さい。
ハワード：　五ポンドと五ポンドでは不快なことは我慢できない。
グラジェン：　皮なめし職人はいくら払うのだ。彼くらいは払える。
アストン：　十ポンド払う。
グラジェン：　二十ポンド持っていってくれ。
閣下、お願いだから、粗野な言葉をお許し下さい。
本当に、国王には悪意はありません。
ボウズ：　閣下のご辛抱を懇願いたします。
ハワード：　あなたの願いでその罪は許しましょう。
それでは出かけよう。すべきことは終わった。
アストン：　この時期と場所では終わりました。閣下。（グラジェンへ）
さあ、金を持ってこい。
ホブス：　立派なグラジェン、今回は切り詰めて何を節約したのか。
黒プティングの価値もないものだろうな。

（退場）

5 幕 1 場　ショアの家

ジェーン・ショアとブレイジ夫人登場。

ブレイジ夫人：　さて、ショア夫人。急いで私を呼んだのは、
どのような緊急事態があったからですか。
本当に身体でも悪いのかと
半ば怖れていました。
ジェーン：　大丈夫、悪くも良くもない。
あなたに話した病気でまだ苦しんでいるだけ。
王からまた手紙が来ました。
哀れな魂がこれほど悩んだことはない。
ブレイジ夫人：　でも返信は役に立ちませんか。
ジェーン：　立ちません、ブレイジ夫人。返事は無駄です。
暴力的な攻撃で私の神聖な結婚の誓いまで
侵入しようとするのは彼です。
おお、国王が王としての立場と高い身分を
忘れているなら、私は一体何者でしょう。
いつも変装して国王は私の家に来て
へり下った言葉で愛を告白されます。

夫は悲しんでいる。ジェーンを失うことを
思えば、彼にどうすることができよう。
国王は来られない時は手紙を書いて、
比類のない贈り物を提供されます。
それも全て私を手に入れるためです。

ブレイジ夫人：　ショア夫人、本当に危険な状況です。
あらゆる点で疑惑の怖れが満ちている。
誘惑に負ければ、徳の名前が傷つき、
あなたの愛する夫は軽んじられます。
愛に応じなければ、今は称賛している
王の愛が多分憎しみに変わるでしょう。
王の憎しみは死へ繋がることは周知です。
私は忠告を与えるような人間ではありません。
立派なショア夫人、したいようにしなさい。

ジェーン：　それなら何をすれば一番良いか教えて下さい。

ブレイジ夫人：　ご存知のように、王の身分の高さが罪を免除します。
王の価値は罪を小さく見えるようにします。
そしてあなた自身、子供たち、友人達はすべて
世間的に高い地位に昇るでしょう。この世俗的な
栄誉も、ご存知のように、良いものです。
私は忠告を与えるような人間ではありません。
立派なショア夫人、したいようにしなさい。

ジェーン：　ああ、最初にした約束を守ることは誓約で
縛られていることを知っている。
虚飾がゴミとなっても有徳は生き残ることも。

ブレイジ夫人：　中傷が犯罪者の名前に触れない時は、
不名誉も恥ではないと人は言います。
うなずきが最大の罪を消滅させるという
国王の腕にあなたは抱かれることになります。
身分の高い多くの人々も王には喜んで
頭を下げ膝を曲げるものです。
手に多くのものを持ち、命令されることはなく、
いつも命令している王が、小さな不正の
もたらす罪を逃れるという極端な事態で、
上手く働けないことがありましょうか。
私は忠告を与えるような人間ではありません。
立派なショア夫人、したいようにしなさい。

ジェーン：　身分は低いが、全ての中傷から
自由な良心を持ち、私は生きている。
中傷の世界では、高い身分が突然没落し、
優雅な生活も時々厳しい現実にさらされる。

ブレイジ夫人：　本当に人目につかない生活も良いと認めます。

これは他の意味で理解されたくありません。
金細工師の妻であることは満足するものです。
でも宮廷での日々はもっと楽しいものです。
家庭のやりくりは名誉に価します。
でも王の相手とは何と素晴らしいでしょう。
主婦という名前は立派なものです。
でも全ての言葉にマダムと付くのは栄光を与えます。
私は忠告を与えるような人間ではありません。
立派なショア夫人、したいようにしなさい。

ジェーン： ああ、二つのうちどちらが良いか知ることができたら。
知らないことは苦痛で気分が悪くなります。

ジェーンの若い使用人登場。

どうしました、何か知らせでもあるの。

若い使用人： はい、先日、店で宝石を買いたいと
言っておられた紳士が来られて、
奥様と話したいと言っておられます。

ジェーン： おお神よ。それは国王だ。
ブレイジ夫人。この場から離れて下さい。
王が去られたらすぐ会いに行きます。
お前は店に戻っていなさい。

（退場）

ブレイジ夫人が去り、以前の変装をして国王登場。

エドワード王： 美の誇りよ、招かれざる客として押し掛けるので、
あなたは図々しいと非難されるかもしれない。
でも愛が先導者なので、罪は軽いと思われます。

ジェーン： あなたの臣下の粗末な家にようこそ。
陛下、心が人に危害を加えようとしなければ、
どこに行かれようと罪ではありません。

エドワード王： あなたが見るほとんどが、私にとって危害です。
あなたのために、王は何と彷徨っていることか。
私の愛情を知ってくれなければ、
富も貧しくなり、高い地位も低くなる。

ジェーン： 天空で他の全ての蒸気を乾かし、
最も栄光のある光で世界を導くはずの
太陽が、わがままな夜で自身を
包まれるほうがもっと哀れです。

エドワード王： あなたがいないことが原因です。月の女神よ。
あなたの銀色の輝きを空中に広げてください。

そうするとすぐ喜ばしい朝が現れるでしょう。
ジェーン：　私は踏み迷いません。私の馬車を導くものは、
動かない、不変の固定した星です。
エドワード王：　だがその星に「流れ星」という名前を与えよう。
そして将来起こる非難からあなたと彼を守ろう。
ジェーン：　大群の天使がこの不正を嘆くとしたらどうでしょう。
誰がその不吉な前兆に言い訳ができましょう。
エドワード王：　嫉妬深い目をかすませ、その眼を抑え込むこと、
それらは私の力で何とでもなる。
だが、この分かり難い話をやめて、
やさしいジェーン、宮廷に来てもらわねばならぬ。
もっとも強大な貴族を操る国王の舌がお願いするのだ。
王笏を持つ王の手が、愛を誓っているのだ。
心の中ではあなたのためになると確信している。
妨害はされない、されてもいけない、させはしない。
ジェーン：　王が強要されますなら、何も言うことはありません。
でもこの日を見るまで生きなかったらと思います。
エドワード王：　その時を非難するな。喜ぶべき理由を与えよう。
ジェーン、夕方にはあなたに使いを出す。
あなたと夫は昇進することになるだろう。
その証として、真実の愛のキスを受けなさい。
何も悪意はないし、何も不都合なことはない。（退場）
ジェーン：　ええ、宮廷に入ります。その時が始まる前に、
罪をどのように悔いるか学びましょう。（退場）

5幕2場　ロンドン市長の家

ロンドン市長、ショア親方、フランシス・エマースリイ登場

ロンドン市長：　従兄弟のショア、そのように変装している
王を見たのは確かなのか。
ショア：　家内の叔父であるあなたを知っているし、
彼女の兄フランク・エマースリイも知っている。
あなた方を知っているように、たしかに
あの変装は王でした。
エマースリイ：　これら全てを認めなさい。
すなわち、陛下が変装してこの町の習わしを
視察することを好み、ある時には変装しないで
視察することも好きだという事実を。
弟のショアよ、それで不機嫌になる理由は
あまりないと思う。

ロンドン市長：　おお、ショアの気持ちが分かった。
私の姪である彼の妻が美しく、
高潔な資質のため尊敬されているので、
彼の愚かな思いの中で、陛下が彼女に
惚れていると疑っているのだ。
従兄弟よ、あなたが彼女と結婚することで、
いつもの通路を行くきれいな身のこなしから、
彼女がどれくらい変化したか知らない[37]。
あなたがよく話しているのを聞いたが、彼女が
誰からも嫌われないことは十分に知っている。
今あなたの頭の中にある軽率な思いが、
しかもそのように身分の高い人物に関して、
彼女を疑うようなことがあれば、
従兄弟よ、愚かなあなたを宥めると言うより、
彼女の尊厳のために、あなたの思いを
世間に公表し、あなたの愚かさが自身に
苦しみを与えると、はっきり言おう。

ショア：　叔父上、怒りがあまりにも先走りして、
せっかちにも、私をたいへん誤解されている。
私はあなたの姪の名声を尊敬しており、
それを信心深く胸の中に飾っています。
これに関しては、あなたや他の人と同じように。
王が普通の使用人の格好をしてやってくることを
あなたに話している時も、私の妻が間違いを
犯したとか、通常の謙虚さから少しでも
外れたとか、ほのめかしたでしょうか。
しかし、商売上、彼女がする、あるいはできるとする
技術のためと言うより、使用人を監督するために、
彼女が店に座っているとき、王がやって来て、
彼女には話しかけ、私とは取引をしないと
いうことは、奇妙なことではないですか。
ああ、叔父のフランク、彼女の全ての親族が集まって
私の疑問とする原因を正しく評価して欲しい。
妻は疑っていないが、王がこっそり徘徊する
目的は何かと疑わせてほしい。
言わせてもらいますが、美人を妻に持つ夫は
こっそりと策略をめぐらすお客を恐れるのです。
特に王のような力を持っている人は恐ろしい。
王の身分は醜い罪でも美しくするものです。
彼が来るのは妻への接触ではないとしましょう。すると
まがいの合成金属か量目不足の金か、他の些細なものを
売った罪で、私の命を密かに狙っているのでしょう。

王達が自分で世間をこっそり見ている時は、
人々は怖れるものだ。私も怖れないはずはない。

エマースリイ：　弟よ、信じてくれ。こんな疑わしい場合は、
どのように答えてよいか分からない。
フランスでの王の権利を取り戻すため、
集められた多くの上納金があり、
国中の多くの土地をめぐって王の臣下が
日も夜も騒動を起こしている深刻で忙しい時に、
陛下がこれほど大きな問題から離れて、
このように変装して歩き回ることが
できるかどうか疑わしいのだ。
あなたの召使いではないですか。

若い召使い登場。

ショア：　ええ、確かにそうです。どうした、何か知らせがあるのか。

若い召使い：　ご主人、奥様が覆いのある御車で、貴族の方によって
宮廷に連れて行かれました。奥様は行かれました。
これが私のお知らせすることです。

ロンドン市長：　何と、姪が王のもとに連れて行かれたのか。
貴族によってだと。彼と一緒に行ったのか。
いや、こんなことは好ましくない。

エマースリイ：　何と、彼女は行ったと言うのか。[38]

ショア：　落ち着いて、叔父上。怒鳴らないでくれ、立派なフランク。
恥をかいたのは私です。誰によってか。王だ。
そんなことを話すのは普通ではない。
彼女は行ったとお前は言うのか。

若い召使い：　そうです、本当に行かれました。

ショア：　どうしようもない。神の名にかけて、行かせよう。
あなたもどうしようもない、叔父上。あなたでも。
王がおせっかい屋[39]なら、身分の低いものは悲しむ。
荒れ狂おうか。いや、さようなら、ジェーン・ショア。
かつては私の妻であったが、これからは違う。

ロンドン市長：　彼女が宮廷に行ってしまった。　（ロンドン市長退場）

ショア：　叔父上、お怒りでしょうか。
私の例で大きな怒りをなだめて下さい。
身分の高い人の罪を知ること、
それで十分だ。彼が改めることができれば。
フランク・エマースリイ、妻はあなたの妹であった。
私が持っている土地、品物、全てあなたに上げます。
ただし、この汚名のしるしを帯びるという
あわれな運命は私が持って行かねばなりません。

マシュー・ショアが帽子に王の不名誉を
付けていたとは絶対に言わせない。
エマースリイ：　立派な弟よ。
ショア：　決心を変えさせて欲しくない、私は決心したのだ。
手間取ることはしない。イングランドよ、さようなら。
エドワード、それほど立派な報酬を私に与えたのだ。
彼のことを話すのか。我慢しろ、我慢しろ。
さあ、フランク、私は全てをあなたに与える。
そして私は運命が待っている海外へ行くのだ。　（退場）

5 幕 3 場　宮殿

エドワード王、ハワード、セリンガーなど登場。

エドワード王：　我が国の臣下達は、当面の戦役に対して
上納金を気前よくまた惜しみなく
払っているだろうか。
従兄弟のハワード、この件の苦労には感謝する。
全ての州に感謝の礼状を送らせて、
どれほど高く彼らの親切を
評価しているかを知ってもらおう。
ハワード：　一つだけ、陛下、報告を忘れるところでした。
愉快な亭主、タムワースの皮なめし職人です。
エドワード王：　彼がどうした、従兄弟よ。
ハワード：　彼は実に気前がよかった。
二十枚もの古いエンゼル金貨を陛下に差し出しました。
彼が非常に気前よく払うのを見て、他の者も
普段以上に無理をして払ってくれました。
エドワード王：　きっと、あの正直者の皮なめし職人には報いる。
彼が約束を守って宮廷に来れば、
本気でおもしろいことをするのに。
ハワード：　陛下、彼がついに宮廷に来るのはまもなくです。
重大な理由でロンドンに来ています。
息子がスタフォード監獄におり、
盗みの件で服役しています。
陛下が息子の罪を許してやれば、
皮なめし職人には大きな報いとなるでしょう。
エドワード王：　ロンドンに来てから誰が彼を見たのか。
セリンガー：　陛下、あちこちを見物していた彼をホルボーンで
偶然に私が発見しました。部下をその場から離れさせ、
お仕着せを身に付けて、彼の前に行くと、

すぐに私と分かりました。
「トム、元気か」「ネッドはどうしている」と言いました。
「あの正直で陽気な絞首刑人はどうしている」とも。
陛下がこの日ロンドン塔にご自身が
行かれることを知っていましたので、
彼にそこで会うように言いました。ネッドと私は
彼を王の面前に連れて行き、
息子の罪を許すという算段です。

エドワード王：　その目的のための準備ができるまで、
彼から見つからないよう注意してくれ。
もう一回気晴らしをしようと思うからだ。
トム・セリンガー、その仕事をしてもらおう。

セリンガー：　陛下、安心して、私に任せて下さい。

ロンドン市長登場。

エドワード王：　ようこそロンドン市長。さて、最近集めた
上納金について、市民たちに私の感謝を
伝えてくれましたか。

ロンドン市長：　ギルドホールにて、市民たちの前で、
法律官が彼ら全員に感謝の御礼を
上手く演説してくれました。
それを彼らは陛下に対する
あたたかい尊敬と愛で受け取り、
陛下にこの程度しかできないことを
悲しんでいるようでした。

エドワード王：　ロンドン市長、あなたと市民たちに感謝します。
それからロンドン塔に一緒に行って、
この緊急の準備を進めるために、
守るべき手順を検討しましょう。
上納金がどんなに必要であったかを
市民に話したほうが良いかもしれません。

ロンドン市長：　畏れながら、陛下にお伴いたします。
（傍白）だが心を悲しませるものが一つある。

（退場）

5幕4場　水辺

ショアとトランクを運ぶ二人の水夫登場。

ショア：　行ってくれ、正直な水夫。荷物を船に積んでくれ。

そして船長にすぐ行くと伝えてほしい。

貴婦人のように着飾り、手にいろいろな嘆願書を持ってジェーン・ショア登場。
顔覆いを外して、エア、パーマー、ジョッキー、ラフォードのような訴願者に
付き従われている。

第１水夫：　そうします。だがあの婦人は誰だろう。
多くの請願者が従っているのだから、
身分の低い婦人とは思われません。
ショア：　どちらか行って、彼女の名前を聞いてくれ。
（ショアの荷物を運んで水夫たち退場。一人が
行く途中でエアに話しかける。）
第１水夫：　正直な方よ、あの婦人の名前は何でしょうか。
エア：　彼女の名前はショア夫人で国王の愛人です。
宮廷では請願者には特別やさしい方です。
ショア：　彼女の名前はショア夫人で国王の愛人、か。
どこで頭を隠し、耳をふさごうか、
ふくろうのように驚いているだけなのか。
私と一緒に彼女が通りを歩くと、
人々は通りすぎる時に言ったものだ。
「美しくしとやかなショア夫人が行く。」
彼女が町の夫人の服装の時は、ご夫人方から
称賛されたので、市民たちは、奥さん方に話す時は、
ショア夫人からいつも模範を引き出したものだ。
だが今、彼女は宮廷の服装で歩いている。
この人は、かつて上品な黒っぽい服を着ていた
貞潔で真面目なマシュー・ショアの奥さんではない。
何故なら、彼女は今エドワード王の囲い者だからだ。
おお、偉大であるが悪の称号、名誉ある恥だ。
私は彼女の善を持っていたが、王よ、お前は悪を持っている。
かつてはショアの誠実な妻、今はエドワードの愛人だ。
とりわけ、彼女の新しい行動に注意しよう。

この間、彼女は個人的に嘆願者と話し、彼らの書類を見ている。

エア：　立派なショア夫人。私の息子の命の件は覚えてますか。
ジェーン：　あなたの名前は何ですか。
エア：　トマス・エアです。
ジェーン：　ここに王がサインした恩赦状があります。
エア：　取るに足りませぬが心からの感謝として、
エンゼル金貨で二十ポンドお受け取り下さい。
ジェーン：　何と、陛下の恩恵と臣下の血を賄賂のために

買ったり売ったりしていると思うのか。
違う。神よ、贈物なしで善行をさせてほしい。
私の全ての善でも私の悪を償うことはできない。
だが、いつも善行を行う努力をしていこう。

ショア：　（傍白）全ての善行もあなたの悪にメッキをするだけだ。

パーマー：　奥様、陛下の役人から無理矢理奪われた
私の土地の返還はどうなっていますか。

ジェーン：　あなたのものを返還させるのが王の意向ですが、
役人がなかなか同意しないでしょう。
でも安心しなさい、悪いようにはしません。

ショア：　（傍白）私にはそうは言えない。私には不当な仕打ちがある。

ジョッキー：　奥様、不誠実でろくでなしのグレンデールの
ビリー・グライムが私の土地を不正にも
取り上げた件で助けて頂いています。
それで風のように巧みに走る、きれいな子馬で、
あなたの善意に報いたいと思います[40]。

ジェーン：　いいですか、あなたの訴えは長い時間が必要です。
遠くに住んでいるから費用を軽くするために、
私の召使いと一緒に食事をとっても良いですよ。
王からいくらかの救援金をもらってあげましょう。

ショア：　（傍白）王からもらったのは冷たい救援金だった。

ジョッキー：　神の恵みが立派な美しい顔に降りてくるように。
奥様、私はあなたのために祈ります。いつも祈ります。

パーマー：　善行を実施する気苦労に、神よ、祝福を与えたまえ。

エア：　善行を行うやさしい心を持った彼女が人生では
不幸な目にあっていることを憐れみたまえ。

ショア：　（傍白）私もそう言おう。ああジェーン、あなたが他人を
気にして、私の苦しみを悲しまないのは気持ちが萎える。

ラフォード：　奥様、私の訴えの件をお忘れのようですが。

ジェーン：　この国から外国へ穀物と鉛を
輸出する特許状の件ですね。
書類を持っていましたが、破りました。
どれほどこの国を傷つけるか全く気にしない
あなたの耳を引き裂いても恥ずかしいとは思わない。
あなたの財布を満たすために、貧乏な人は飢え、
敵は我々の鉛の弾をやりとりするのですか。
ラフォード親方、王には執り成しはしません。
あなたがそれで罰せられない限り。

ジョッキー：　本当に手際のよい婦人だ。キリストの祝福がありますように。

遠くを歩いている夫を彼女は見るが、他の請願者と間違える。

ジェーン：　あの人は別の請願者ですか。彼の書類は持っていません。
誰か行って、彼の望みを聞いて来なさい。
ショア：　そうだジェーン。契約で結ばれた愛の証文だ。
証文は持っているが、あなたはそれを取り消した。

ここで彼女は彼に気付き、泣きながら、彼のほうへ来る。

ジェーン：　おお、神よ。私の夫やさしいマシュー・ショアです。
ショア：　ああ、ジェーン。私があなたの夫とどうして言えよう。
かつては妻であったが、今はそうではない。
あなたは妻であった時も乙女であった。
乙女であった時でさえも妻であった。
たいへん立派で、謙虚で、貞淑であった。
夫が生きているが、今は離婚している。
あなたが妻であった間、彼は夫であった。
妻の身分は、不名誉な生活のため汚れている。
今は未亡人でも、乙女でも、妻でもないので。
ジェーン：　あなたという喜びの全ての宝があった砦を
開け渡したと、告白しなければなりません。
でも、やさしいショア、砦を渡す前に、
哀れな貞潔にかつて攻撃をした最長で
最大の包囲攻撃に耐えました。
その砦は常に難攻不落でしたが、
攻撃をした王には明け渡しました。
でも、あなたにその砦をもう一度返します。
そうしても王は私を非難できません。
私で得たものを私によって失うのですから。
ショア：　いや、ジェーン、王が一度でも所有したものに
私が許される場所はない。
身分の低い人間でも愛ではライバルが我慢できない。
身分が高く競争相手がいない王にはなおさらそうだ。
エドワードのような高貴な人の愛人は、
高貴すぎてショアの妻にはなれない。
ジェーン：　宮廷での楽しみを拒絶します。
ショア、あなたと一緒に行かせてください。
その名を失ったので、妻としてではなく奴隷として。
受け入れてくれるなら、真心の奉仕で
私があなたに犯した罪を償います。
ショア：　ジェーン、一緒に行くだって。おお、神よ、
私を王の反逆者にしないでほしい。
私が王の楽しみを奪う犯罪者となって、
盗みの罪を着て逃げると言うのか。

いや、愛しいジェーン、できないと言おう。
臣下のものは全て王のものではないか。
私は王の大権をためしたくない。

ジェーン：　それではやさしいマット、この国にいて下さい。
エドワードに関しては、私に不可能はありません。
ヨーロッパの三人の偉大な王を歓待して、
ある日、ロンドンでご馳走をした
あのリチャードより裕福にしてあげます。
欲しいものを言って下さい。百万でも、
あなたが満足すれば、ショア、差し上げます。

ショア：　欠乏と世俗的な悲惨を味わった人にとって、
たしかにそれは慰めともなろう。
だが私は富が取り返せないものを失ったのだ。
全ての世俗的な損失は、私の損失に較べれば小さい。
おお、私の全ての富。あなたを失ったことは、
時と財産が修復できる以上のものなのだ。
だから愛しいジェーン、さようなら。昔は私のものであった。
あまりにも豊かすぎた。それをエドワード王は知っていた。
さようなら、世界よ。女性やあなたを
信頼する人は必ず騙されるであろう。　（退場）

ジェーン：　おお、ショア、さようなら。哀れな人。死んで、あなたを
かつて愛したことを話そう。ショア、さようなら、さようなら。
（退場）

5幕5場　ロンドン塔

エドワード王、ロンドン市長、ハワード、セリンガー、従者が登場。

エドワード王：　眠くなるようなほら穴から眠気を誘う
大砲を起こし、まもなくその大砲が用心深い
フランス人に永遠の眠りの魔法をかけるだろうから、
また他の全てはフランス行きの準備が整っているので、
しばらくの間、気苦労と休戦協定を結ぼう。
おもしろい皮なめし職人がまもなく来る。
彼とちょっとした楽しいことをしよう。
だから、ロンドン市長と他の友人たち、
私を知らないことにしてくれ。
正体を隠して、皆、仲間のふりをしてくれ。
変装するためにマントを貸してくれ。
トム・セリンガー、他のマントを借りなさい。

王とセリンガーが公式の服を脱いで、外套を着る。

皮なめし職人、来たい時に来なさい。準備は整った。
ちょうどよい時に、見なさい、彼が来ている。

ホブス登場。

トム・セリンガー、行って彼と会いなさい。
セリンガー： 何とジョン・ホブスではないか。本当に、宮廷へようこそ。
ホブス： 有り難い、正直者のトム。絞首刑執行人のネッドはどこだ。
あの気狂いの悪漢はどこだ。彼には会えないのか。
セリンガー： ネッドならあそこにいる。あれが彼だ。
ホブス： 何とネッドか。疫病に捕まったか。悪漢として元気に
暮していたか。気違いのごろつき、どうしていた。
どうしていたのだ。
エドワード王： 元気にしている、ジョン・ホブス。会えて嬉しい。
だが何故ロンドンに来たのか、聞かせてくれ。
ホブス： ああネッド、つむじ風にここまで連れて来られた。
息子の件だ。私の息子のことを話さなかったかな。
エドワード王： 聞いたよ、皮なめし職人。息子はどうなった。
ホブス： 本当にネッド、息子はカーパードッキイにいる。窃盗の罪で
スタフォード監獄に収監だ。お前が王にお願いして息子に
もっと同情してもらわないと絞首刑になる。
エドワード王： それが全てなら、皮なめし職人、息子の命は保証する。
王から恩赦状をもらってやろう。
ホブス： そうしてくれるか、ネッド。気持ちの良い言葉に対して、
娘のネルがお前に贈ったものを見ろ。お前が見たこともない
コベントリー絹の青糸で織ったハンカチだ。
エドワード王： お前が多分知らないもっとよい集まりの時に、
彼女のために着てみよう。
ホブス： 何と、ネッド。もっとよい贈物[41]だって。絹、布、技術、
全てこれ以上のものはない。いいか、ネルが作ったのだ。
だがネッド、この連中の中に王はいるのか。
長いひげを生やし、赤い外套を着ているのは誰だ。
神にかけて、ネッド、彼が王だと思う。名前を忘れたが、
ある貴族の劇団員からそれを学んだ。
エドワード王： どのように役者たちから学んだのだ、皮なめし職人。
ホブス： 役者たちが、タムワースで笑劇や喜劇を演じる時、
王はいつも彼のように長いひげを生やし赤いガウンを
着ている。 だからあの人が国王だと思う。
エドワード王： いや、皮なめし職人、本当に、彼は王ではない。
お前がロンドンを発つ前に、王に会わせてやろう。

そして息子への恩赦状も持たせてやろう。
この男はロンドン市長で貴族だ。
法律官もいたが、彼はこの場を去った。

ホブス：　ここの宮廷人は何という異名を持っているのだ。馬とか
靭帯病とか、本当に。リッチフィールドにはいない。
正直な執政官と兄弟たちはいる。そんな言葉のほうが
俺たちにはぴったりくる。

エドワード王：　ロンドン市長、私のためにお願いですから、
この正直な皮なめし職人を歓迎して下さい。

ロンドン市長：　ロンドンへようこそ、我が友よ。
歓迎のしるしとして、我が家を見てもらい、
今晩は食事に招待します。

ホブス：　善良なる市長、有り難うございます。だが食事なんか
欲しくありません。子供がどうなるか知るまで飲むことも
食べることもできない病気の豚のようになっています。
ネッドとトムよ、俺が宮廷に来れば何か
良いことがあると約束してくれた。今するか、
できなければ絞首刑にでもなれ。

エドワード王：　王が来たらすぐにしてやろう。

セリンガー：　皮なめし職人、保証する。息子の命は心配するな。

ホブス：　息子の命ではない、息子の死を心配しているのだ。

聖キャサリン教区の管理官とノートン未亡人登場。

管理官：　陛下に健康と幸せを与えたまえ。

エドワード王：　聖キャサリン教区の管理官が全てを台無しにした。

ホブス：　ああどうしよう。生まれてこなければよかった。

皮なめし職人が気絶して倒れる。宮廷人たちが意識を取り戻させようとし、
その間王は自分の服装をする。

エドワード王：　皮なめし職人を介抱してやれ。傷ついてはいない。
王冠にかけても、彼に死んで欲しくない。

未亡人：　陛下のお許しがあれば、彼の側に行かせて下さい。
ここに生姜がある。噛みなさい、あなた。

ホブス：　生姜を噛め、生姜を噛めだって。犬の糞を噛むのと同じだ。
俺はただの死人だ。ああ陛下。哀れな気がいい男を
そのように扱うとは。もういい、俺は死ぬしかない。

エドワード王：　皮なめし職人、いつ死ぬのだ。分かるのか。

ホブス：　いや、あなたの好きな時に死にます。陛下を無骨なネッドとか
気違いの無頼漢、与太者と呼んで不愉快にしました。陛下が
私を絞首刑にすることは分かります。だから、これ以上騒動を

起こすことはやめて、私をスタフォードに送り、そこで神の名に
かけて、息子と一緒に絞首刑にして下さい。そしてここにも
あなたと同じような正直者がいる。陛下は私に彼のことを
無骨なトムと呼ばせた。請け合うが、彼の名前はトマスで身分の
高い人でしょう。だから、いつでもどこでも絞首刑にしなさい。

エドワード王：　皮なめし職人、聞きなさい。お前を許すばかりか、
王として持つ全ての親切で歓迎もする。
そして息子の罪もまた許してやる。
誰か行って規則通りイングランド国王の印章を
押した証書を作るようにしてくれ。　（一人の宮廷人退場）
お前がロンドンに来るのにかかった費用を
支払うために四十ポンドやろう。
さて、皮なめし職人、何と答えるかな。

ホブス：　言うことが本当なら、正直者のような話し方だ。

エドワード王：　皮なめし職人、王の言葉にかけて、話した通りだ。
ところで聖キャサリン教区の管理官、何か用事か。

管理官：　慈悲深い陛下、あなたの臣下と比べれば
少ないですが、貧しい聖キャサリン教区の
多くの上納金を持ってきました。
運びやすくするため全てをエンゼル金貨で、
五百ポンドを教会から運んで来ました。
ノートン夫人という未亡人は、自分自身で
陛下への贈物を持って来ました。

未亡人：　お許しください、陛下。私の考えでは、
厚かましさでもなく、うぬぼれでもなく、
陛下への愛と義務、また王に会いたいという
欲望のために、図々しくも陛下の面前に来ています。
ここにいる教区の管理官は上納金について、
二十ポンドで十分だと話しておりました。
私はそうではないと思っていました。
陛下の足下に、未亡人の少額の金であり、
私の熱意の証から、控え目な義務として、
陛下へ二十ポンド差し上げます。

エドワード王：　さても、王冠にかけて、勇敢で元気な女だ。
これまで示された全ての気前良さの中で、
この女性のものが一番好きだ。
お前の名前はノートンか。

未亡人：　はい、慈悲深い陛下。

エドワード王：　未亡人になって何年になる。

未亡人：　陛下、それが
近くのシュロベタイトで、ちょうど十二年前に
私の夫ウィルキンを埋葬してからです。

エドワード王：　その間ずっとお前の身を再び預ける男が
見つからなかったのか。
未亡人：　ウィルキンのような男はいません。
彼の愛は比べるものがなく、彼から考えますと、
他の男とはキスをする価値はありません。
エドワード王：　価値はないのか、未亡人。私がしよう。どうだ。

彼女にキスをする。

未亡人：　いまいましいが、素晴らしいキスだった。
年老いた女性を若くさせるようだ。
優しくて愛すべき陛下、そのキスに対して
未亡人がどれほど蓄えからお金を支払うか見なさい。
もう一回のキスで古い貨幣で四十エンゼル金貨を上げます。
エドワード王：　本当に未亡人、お前にキスを与えてやろう。
ジョン・ホブス、お前は男やもめだ。こんな女房は必要であろう。
ホブス：　一回のキスで二十ポンド。桶の中に木の皮を持っているほど
多くの二十ポンド袋を持っていても、彼女は三ヶ月で
使ってしまうだろう。キスがそんなに高いなら、
聖キャサリン教区の未亡人はごめんです。
未亡人：　無骨者で野暮な田舎者。何も私を魅惑するものはない。
エドワード王：　ロンドン市長、有り難う。私の市民に
よろしく伝えて下さい。
フランスへ行かねばならぬ。皆、さようなら。
さて、皮なめし職人、私と一緒に宮廷に来い。
明日はロンドン市長と会食をして、
その後は好きな時に故郷に帰ってよい。
神と権利が私のために戦ってくれることを願う。
さようなら、私の苦労が報いられるように祈ってくれ。

（全員退場）

終わり

注

[1] パエトン。「(ギリシャ神話) Apollo または太陽神 Helios の子; 父から借りた日輪の車が地球に接近しすぎたために Zeus が雷電を放って彼を殺した」(ジーニアス英和大辞典)。
[2] ペック。穀物などの乾量の単位。
[3] ヒポクラス。「ぶどう酒に蜂蜜・香辛料などを加えた中世ヨーロッパの滋養飲料」(研究社新英和大辞典)。
[4] 原語は that's flat。*OED* は "In the conclusive expression, *that' flat* (a) formerly=that's the absolute, undeniable truth; (b) a defiant expression of one's final resolve or determination" と注を付けている。
[5] ボウ通り。「ロンドン Westminster 区 Strand の街路; 中央警察裁判所がある」(ジーニアス英和辞典)。ロンドン市長がこの地名を持ち出したのは、マイルエンドから近いからである。
[6] 原語は true velvet-jacket であるが、ファルコンブリッジは市長が戦闘という緊急事態でも形式に叶った服装をしていることを嘲笑している。
[7] 原語は flatcaps で、ロンドン市民の意味であるが、軽蔑的な意味が含まれる。
[8] タイバーン (Tyburn) は昔ロンドンにあった死刑執行場。現在の Hyde Park の Marble Arch の近くにあった。
[9] スズメバチは攻撃的で有名。
[10] 原語は Rantam, scantam。*OED* がこの箇所を引いているが意味を付していない。
[11] ハギス (haggis)。料理名で「羊や子牛の臓物を刻み、オートミール・香辛料など合わせてその胃袋に詰めて煮たもの」(研究社新英和大辞典)。
[12] 奇妙な言葉であるが、Richard Rowland は viol と vile の語呂合わせの可能性もあるとしている。Richard Rowland (ed.), *The First and Second Parts of King Edward IV* (Manchester U. P., 2005), p. 112.
[13] これからの二人を暗示している台詞。
[14] 市長夫人は死んでおり、クロスビイは天涯孤独なので、死んだ市長夫人の女性の係累を指すのであろう。
[15] 造幣局は 19 世紀まではロンドン塔の近くにあった。
[16] 賃金のもっとも安い職業。
[17] 実際には、エドワード四世の時代のロンドンには、25 個の守備隊があった。
[18] 原語は parenthesis。*OED* は "A passage introduced into a context with which it has no connection; a digression" と語義を与えて、この箇所を引用している。
[19] 首は処刑で切り落とされるから。
[20] *OED* の ear の項目を参照のこと。
[21] hart と heart の間違い。
[22] dear と deer の間違い。
[23] 獣皮の肩部と腹部を除いた部分の半裁。
[24] ホブスは his grace の grace を「慈愛」と解釈した。
[25] boot には「靴のブーツ」と「おまけ」という意味を持っているので、エドワード王は言葉遊びをしていることになる。
[26] ホブスは progenity と言っているが、progeny の意味である。*OED* はこの個所を引用している。
[27] ホブスは prodigality を probicality と間違えて発音している。
[28] 原語は bending。「曲がりやすい」という意味と「性的に誘惑されやすい」という意味がある。

[29] The sentence “thy heart were in thy hose” means “ludicrous intensifications of ‘the heart sinks’, connoting extreme dejection or fear ”(*OED*). were は仮定法。
[30] ここまでエドワード王の独白は続く。
[31] エドワード王のこの台詞は、周囲の人が聞こえるような声で話されている。
[32] この台詞は独白であろう。
[33]「壁際を歩く」ということは、身分が相手より高いことを示す。
[34] もちろんジェーン・ショアのことを指す。
[35] この台詞は Richard Rowland にはない。
[36] 1470 年エドワード四世が初めて鋳造し、1634 年まで鋳造が続いた英国の金貨（研究社新英和大辞典）。
[37] ロンドン市長のクロスビイはジェーンの性的魅力について述べている。
[38] このエマースリイの台詞は、Richard Rowland にはない。
[39] 原語は meddlers。しばしば性的な意味を持つ。
[40] ジョッキーはスコットランド訛りで話しているが、日本語の方言ではなく、普通の日本語で訳した。
[41] エドワード王の言う presence（人の集まり）を present とホブスは聞き間違えた。